研究紀要

いくの

第 52号

大阪府立生野支援学校

令和6年 3 月

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

（　校長　国津　賢三　）

1　研究テーマと本校の課題、今後について・・・・・・・・・・・・・・・ 2

（　研究部部長　白瀧　ゆかり　）

2　生野支援学校研究テーマ

・日常生活の指導「朝の支度」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

（　小学部　福本　直史　）

・みんなでやってみよう！！修学旅行・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

（　小学部　根津　祐子　）

・ICT 機器の効果的な活用をめざした授業づくり・・・・・・・・・・・・・ 11

（　中学部　藤原　慎士　）

・「教育」から「学習」へ～ICT を活用して～・・・・・・・・・・・・・・ 18

（　中学部　山川　了　）

・体育授業における ICT 機器の活用・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

（　高等部　1 年　）

・「気持ちを合わせて演奏しよう」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

（　高等部　1 年　）

3　校内研修会報告

・校内年間研修・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30

（　研究部　）

・教育講演会「子どもたちの適応と成長を支えるポジティブ行動支援」・・ 32

（　研究部　）

・夏の実技研修会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

（　研究部　）

・発達検査研修会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
（　研究部　）
４　その他
・おいしい給食作りと食育・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
（　指導栄養教諭　寺中　純子　）
・校内発表
地域支援のトビラ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
（　リーディングスタッフ　奥田　光　）

はじめに

今般の学習指導要領の改訂では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が必要とされています。このことは全く新たな学習活動を取り入れるということではありません。また、単に指導方法や技術の改善のみではなく、児童生徒が身に付けるべき資質能力をはぐくむために、児童生徒や学校の実態、指導の内容に応じて授業改善を図ることで、児童生徒の学習の質を向上させていこうというものです。

令和４年の「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（答申）では、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な実現」が求められています。特に「協働的な学び」では、多様な人同士のかかわり合いや、地域社会での体験活動など、様々な場面でリアルな体験を通じて学ぶことの重要性が指摘されています。これらは、「主体的・対話的で深い学び」を具現化していくキーワードとして捉えられており、協働的な「振り返り」や「対話」の重要性にもつながると考えられます。

（特別支援教育 No.88、特別支援教育研究 N.797 より抜粋）

教職員の研修の充実とそれに基づく専門性の向上は大切なことです。我々支援学校の教員は、日々の授業内容を精選し、常に新しい時代に見合った教育内容を創造し、それらを効果的に進めていく力の向上に取り組むことは最も重要なことであると考えます。児童生徒が学校において過ごす大半の時間は授業です。常に児童生徒が自ら進んで取り組み、「主体的・対話的で深い学び」を追求していくために、授業の中身を改善していくことに最も重きを置くべきと考えねばなりません。

令和の日本型教育に求められる「個別最適な学び」「協働的な学び」を実現するために生野支援学校では、年間研究テーマを「子どもたちが主体的に学べる授業づくり」と定め令和３年度から５年度までの３年間に各学部での実践を進めて来ました。特に今年は ICT 機器を活用した授業の取り組みに重点を置いて報告をさせていただきます。

児童生徒の実態を踏まえて、様々な授業の取組みを進めてきた成果を Web 上にデータとしてまとめさせていただきました。この研究紀要第５１号「いくの」をご覧いただき、ご意見などを頂戴できましたら幸いでございます。

令和６年３月　　校長　国津賢三

【研究テーマと本校の課題、今後について】

【研究部部長　白瀧ゆかり】

本校では令和３年度より研究テーマを「支援学校における児童・生徒の主体性を引き出す授業づくり」と設定し、Web 掲載することで本校の取り組みについて発信を行ってきた。教員は児童生徒が主体性を持てる授業を立案することが重要課題である という考えからこのテーマを掲げ、テーマに基づいて実践を紹介してきて今年度で３年となる。今年度はこの大テーマに加え、「ICT 機器の活用」をサブテーマとして設定した。これは昨年度の実践内で共通点のあった ICT 活用事例にもっと焦点を当てて発信したいという考えからの設定である。近年、日本全国において流行した新型コロナウイルス感染症の感染拡大をきっかけに、社会全体のデジタル化が推進されたことは記憶に新しい。この社会的気運を背に始まった GIGA スクール構想により、学校における ICT 環境整備の取組みが国を挙げて進められている。これは支援学校も例外ではない。ICT 機器の活用によって視覚支援が必要な子どもたちにより有効で効果的な情報伝達ができるのであれば、柔軟に取り入れていくことが我々教員にとっても自然な流れであろう。ICT 機器は、情報伝達だけではなく、発進・主体的取り組みを引き出すツールとしても有効であり、大きな可能性を秘めている。これからの教育に関わっていく教職員として ICT 機器を授業内で活用していくことは必須の能力となっていくことが予想される。そうした観点から、ＩＣＴ機器の活用に関わる実践に焦点を当てた。

今年度は各学部から２事例ずつの実践報告を掲載している。小学部からは「みんなでやってみよう！！修学旅行」、「日常生活の指導「朝の支度」」、中学部からは「ICT 機器の効果的な活用をめざした授業づくり」、「教育から学習へ～ICT を活用して～」、高等部からは「主体性を高める体育授業」、「気持ちを合わせて演奏しよう」の計６事例である。新しいツールにはメリットがあればデメリットもあり、現場ではまだ導入に手探りの部分もあるが、各学部の生徒の実態に合わせて本校でも試行錯誤を行っている。こうして本校の実践を共有することで校内外の教育関係者に一例として本校の取組みが参考になれば幸いである。

今年度まで３年間かけて、“授業”に焦点を当てて実践内容を掲載、発信、蓄積してきた。次年度は研究テーマの刷新をする予定である。また、テーマに加えテーマの推進方法も刷新予定で、校内の実践をまとめるだけではなく、外部専門家の助言を得ることも視野に入れている。これは、団塊の世代が退職し若い世代の教員割合が増えている現状の職員構成や、地域・保護者からの要望を受けて学校運営や事務処理、授業準備と教員が多忙を極める職場環境の中で、経験豊富な教職員が若手にノウハウを伝授する機会が失われてきており、この問題は校内における人材による取組みだけでは難しいという実感から、外部人材による助言を得られる機会を設定したいという考えに至ったからである。今年度までの流れとは大きな方向転換となるが、時代や社会の流れも汲みながら、より良い教育活動の実現をめざして、次年度も新しいテーマの推進に取り組んでいく所存である。

【　日常生活における主体性を引き出す指導　】

【　朝の支度　】

【小学部　福本　直史】

【はじめに】

日常生活の指導は、児童生徒の日常生活が充実し、生活の質が高まるように日常生活の諸活動について、知的障害の状態、生活年齢、学習状況や経験等を踏まえながら計画的に指導するものである。また、生活科を中心として広範囲に、各教科等の内容が扱われる。日常生活や社会生活において習慣的に繰り返される、登校、朝の支度、係活動、朝の会や帰りの会、給食、帰りの支度などがそれに当たる。朝の支度では、排せつや荷物整理、着替えなどの活動に取り組むことで、基本的生活習慣の技能を高めることができると考える。これらは、将来の自立生活においても重要な部分であり、小学部の段階から確実に身に付けておきたい技能である。そこで本研究では、朝の支度に重点をおいて、ＩＣＴを活用し児童が視覚的にわかりやすく、主体的に取り組んでいくことができるような実践を行った。

以下、実践した授業の一部を報告する。

※特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小学部・中学部）より

【授業の概要】

１)対象児童：小学部１年

２)授業名　：日常生活の指導

３)期間　　：令和５年４月～１２月

【授業のねらい】

１)対象児童生徒の実態と課題

ひらがなを読んだり簡単な指示を理解したりすることができる。数字への興味が強く１から１０まで読み書きすることができる。「1 番になりたい」という順番に対するこだわりもある。排せつに関しては、トイレでの排尿が定着するように定時排尿に取り組んでいる。尿意を感じると自ら「トイレに行ってきます」と伝えることができるようになってきている。大便の時は、腹部を押さえてうずくまることがあるので促しが必要である。拭き取りの練習に取り組んでいる。更衣については、服の前後や靴の左右を間違えることがあるが、ほぼ自立しており、立位で取り組む練習をしている。整理整頓が苦手なのでその都度言葉かけが必要。また、興味があるものが視界に入ると注意が向いてしまうため、集中して取り組むことが課題である。

２)授業の目的・目標

登校から朝の会までの、排せつ、持ち物の整理、着替えの流れが分かり、一人で行うことができる。

【授業の内容と経過】

1）排せつ

登校後、荷物を自分の机に置き、かばんから手拭きタオルを取り出してから、トイレに行くように促した。４月は、持ち物の整理→着替え→排せつの順に取り組んでいたが、着替えをするまでの間に紙パンツに排尿してしまうことがあったので、登校してすぐにトイレに行くように変更した。トイレまで一緒に付き添い、一連の流れを確認することから始めた。『①ズボンを下す、②パンツを下す、③おしっこをする、④パンツをあげる、⑤ズボンをあげる、⑥手を洗う、⑦タオルで手をふく、⑧教室にもどる』と、手順に番号を振り、言葉かけをしながら動作を示すことで、少しずつ流れを理解するようになってきた。

2）持ち物の整理

トイレから帰ってくると、タブレット端末を使って、持ち物の整理に取り組んだ。はじめは、一枚の紙に朝の支度の手順全体の流れをイラストと文字で提示し、指さしで確認しながら取り組んでいた。しかし、自分が今どこをやっているのかわからなくなり、集中が切れてしまうことがあったため、実物の写真とタブレット端末を使用して取り組むよう変更した。目標である『一人で行う』ことができるように、児童が一人でも簡単に操作ができるアプリケーションソフト（Keynote）を使用して行った。次の活動の手掛かりになるように、連絡帳を出すところから着替えが終わるまでの手順を視覚的に分かりやすいよう写真と文字（図１）で提示した。また、集中が途切れないように、児童の様子をよく観察しながら必要に応じて言葉かけを行うようにした。

図１　持ち物整理 スライド（Keynote）

3）着替え

着替えに関しては、朝の自立活動の時間だけではなく、生活の授業の中でも取り組んでいる。自分の机の横にマットを用意し、その上に立って更衣をすることで、自分の空間を意識しながら着替えが

できるようにした。はじめは、服の着脱を『ふくをぬぐ→かごにいれる→ふくをきる』と３枚のスライド（図２）を使い、スモールステップで取り組むようにした。児童の様子やタブレットを見る回数を観察しながら、本児と相談してスライドを徐々に減らしていくようにした。また、服の前後やシャツを入れるなど、身だしなみも意識できるよう、良い例、悪い例の写真を用意したり、一緒に確認したりしながら、その都度言葉かけをするようにした。

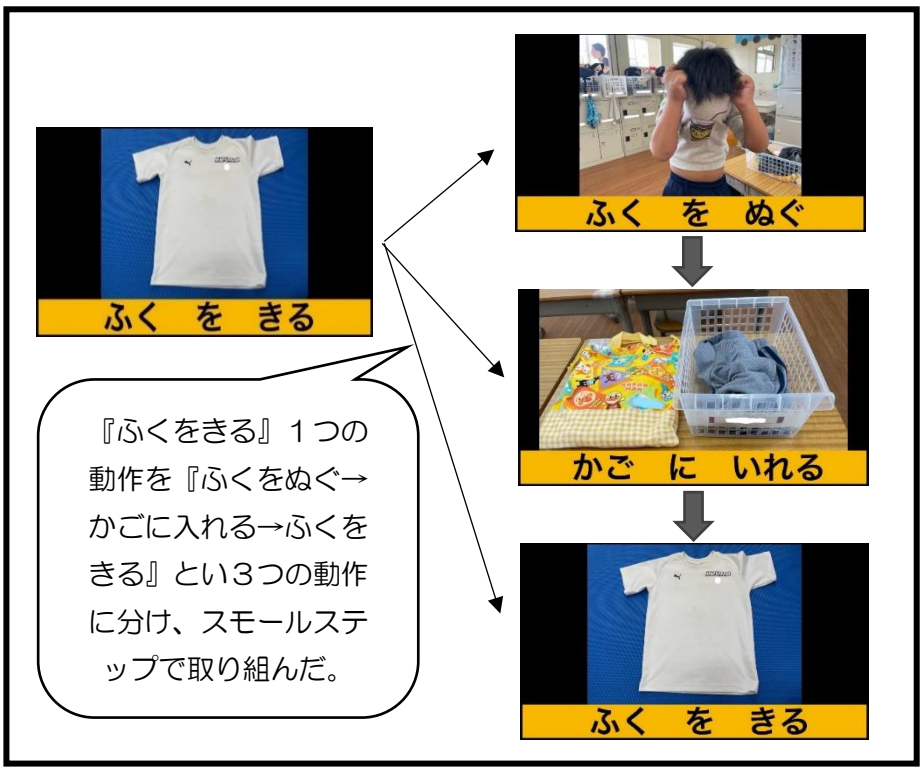


図２　着替え スライド（Keynote）

【ICT 活用のポイント】

・タブレット自体に興味がある。

・家庭でもタブレット端末に触れる機会があるため、操作の方法もすぐに理解でき使いこなすことができる。

・アプリケーションソフト（Keynote）を使うことで、タブレットの画面をタップするだけで次のスライドに代わるため操作も簡単。

・手順表の作成、修正においての作業時間も短縮され、その場で児童と相談しながら写真の差し替えや手順の入れ替えができるので、柔軟な対応が可能。

【結果】

排せつに関しては、日々取り組む中で、徐々に言葉かけの回数が減り、自分で「４番パンツをあげる、５番ズボンを上げる」と声に出して自分で確認しながら取り組むようになった。７月頃から一人でトイレに行って帰ってくることができるようになった。また、登校後すぐにトイレに行くよう変更したことで、紙パンツで排尿することが減り、さらに成功経験を積み重ねることで、トイレでの排せつが定着した。

持ち物の整理では、タブレット端末を使用することで、それを手掛かりに一人で取り組むことができるようになってきている。また、イラストではなく実際の写真を提示することで、取り組み自体もスムーズになった。自分でできるようになってきたことを実感するようになり、登校すると自分から

「iPad ください」と言って、主体的に取り組むことができるようになった。また、タブレット端末を活用できるようになったことで、帰りの支度も同様に一人で取り組むことができるようになった。

着替えでは、手順を細かく写真で提示し、スモールステップで取り組むことで、わからない状況が減り、集中して取り組める時間が増えてきた。繰り返し取り組む中で、手順を確実に覚えてきており現在では『ふくをきる』の１枚のスライドだけで、『ふくをぬぐ→かごにいれる→ふくをきる』という動作を行うことができるようになってきた。

【考察】

今回の実践を通して、本児に関しては、抽象的なイラストを使用した手順表より、タブレット端末で実物の写真を提示するほうが効果的であった。手順表だと、一度に視界に入る情報が多く、自分が今どこまで取り組んだのかを忘れてしまうことが多かった。それがタブレット端末を使用すれば、今やるべきことが画面に一つだけ映るので、余計な情報がないこともスムーズに作業ができるようになった要因だと感じた。また、スライドを作成する段階から、タブレットのカメラ機能を使用して本児自身が写真を撮ったり、一緒に手順を確認しながら本児がモデルとなったりすることで、より興味を引き付け、主体性を引き出すことができたと考える。各教科の授業などでは、初めて取り組む内容においても積極的に手を挙げて挑戦する姿が見られるようになった。それは、自分の身の回りのことを自分でできるようになったという経験を経て、自信がついたのではないかと思う。今回の経験を生かして、自分に自信を持ち、何事にも積極的に挑戦していくことを続けていって欲しい。

【まとめ】

今回の研究実践ではＩＣＴを活用することで、目標であった登校から朝の会までの、流れを理解しほぼ一人で朝の支度に取り組むことができるようになった。今後は少しずつ支援を減らしていき、最終的にはタブレットがなくても一人でできるようになっていってほしい。また、本児の課題であった集中して取り組むことに関しては、タブレットに慣れてくると意欲が下がり、集中力が途切れてしまい、かなり時間がかかってしまうことがあった。視覚的にわかりやすいだけでなく、日々変化を加えながら楽しんで取り組めるような工夫も必要であると実感した。将来的な自立や社会参加に向けて、一人でできないときには助けを求めることや時間を意識して取り組むことなど、新たな課題も見つかった。また、家庭とも日々連絡を取り合い、学校での様子や家庭での状況など、その都度児童の成長を共有しながら家庭とも協力して取り組むことができた。生活習慣の定着を目指すにあたって、学校だけではなく、児童に関わる家族や関係機関などとの連携や、周囲の理解も必要になってくることを改めて実感することができた。今後も、児童の実態把握を的確に行い、一人ひとりのペースを尊重しながら指導を心がけていくと共に、児童が自分の成長を実感し、自己肯定感を高めていけるよう支援していきたい。

【みんなでやってみよう！！修学旅行】
【児童の主体性を引き出す授業づくり～生活科～】

【小学部　根津祐子】

【はじめに】
　修学旅行に向けての学習は、宿泊学習や校外学習などの既習の学習内容も多く、心構えから身辺自立などを題材にし、児童の実態に応じた幅広い学習内容や、経験や知識を活かした新たな課題を設定できると考える。さらに、本学年には、旅行経験の違いはあるものの、年度初めから、修学旅行を楽しみにしている児童が多く、児童の意欲や主体性をいつも以上に引きだすことができるのではと考える。単元全般を通して、選択する機会、友だちのことを考え行動する機会、タブレットやアプリに触れる機会を多く設定することで、自分で意思決定することの大切さや、友だちの考えに気付くきっかけにしていけたらと考える。
　これらの経緯を踏まえ、児童の主体性を引き出す、修学旅行の学年での取り組みの実践について、以下に報告する。

【授業の概要】
１）対象児童：小学部６年　21 名
２）授業名：「みんなでやってみよう！！修学旅行」
３）期間：令和５年９月～11 月

【授業のねらい】
１）対象児童の実態と課題
　宿泊学習や校外学習などを通して、入浴の仕方、食事のマナー、買い物の仕方、電車の乗り方、公共施設でのルールやマナーなどを、場面を設定して体験的に学んだり、実際に経験したりしている。修学旅行を楽しみにしている児童が多いが、新しい環境に不安を覚えたり、修学旅行という活動内容を理解できていなかったりする児童もいる。
　これまで授業や行事の事前学習において、パワーポイントや動画を取り入れた授業を多く経験している。教員からの口頭指示のみよりも、視覚的・聴覚的要素を取り入れることで、授業により集中し、興味をもち取り組むことができている児童が多い。しかし、一斉授業において、どうしても教員からの発信が多くなってしまいがちであり、選択・振り返りをする場面での児童の理解の定着や意思表示を確認するのが難しい場合が多い。また、タブレット機器の操作においては、休み時間に自分の興味のあるアプリや動画を検索・視聴、カメラ機能での撮影などをする児童はいるが、授業の中でタブレットを使用しての作業やホームページの検索などの経験は少ない。

２）授業の目標
　・修学旅行に向けて、やりたいことを見つけて主体的に取り組む。
　・旅行の行程を知り、ルールや内容、やるべきことを考える。

３）指導支援の方法
　A）単元全体を通して一斉授業の場面では、パワーポイントや動画などを活用する。その際には、修学旅行の行程や活動内容などを、児童がより具体的に理解し、見通しや期待感をもって取り組むことができるように、教員からの一方的な日程やマナーの説明にならないように注意する。また、児童自身の選択・作業・振り返りをする場面を多く取り入れ、主体性を引き出すよう工夫する。
　B）学級・個別授業の場面では、体験的活動や映像、タブレットなどを活用する。児童自身の選択・作業・振り返りをする際には、発語や意思表出の少ない児童に対しては、意思表示のツールとして、探究心のある児童に対しては、ホームページ検索の操作を取り入れ、期待度や知識を深めることができるよう、児童に合わせて活動内容や提示の方法を工夫する。
　C）その他、個別に配慮を必要とする児童に対しては、適切な活動目標を設定して適宜対応する。

以上の３点に重点を置き、学年の教員全員で授業を分担・共有し、指導・支援することとする。
【授業の内容と経過】

授業構成（事前学習と事後学習、計 21 時数（1 時数各 30 分～40 分程度）は以下の通りである。

全 21 時数	学習内容	ねらい
第１次３時数（９月中旬） 「修学旅行に行こう」 A）学年一斉授業	日程、行先、移動手段について知る。　※パワーポイント活用	修学旅行について知る。 日程、行先などを知る。
第２次２時数（９月下旬） 「何をするか知ろう」 A）学年一斉授業	活動内容、班・部屋割り、係活動、テーマソングについて知る。 ※パワーポイント活用	行先の詳細、活動内容を知る。 班・部屋割りや係活動を知る。 自分のすることを考える。
第３次２時数（10 月上旬） 「お土産を考えよう」 B）学級・個別授業	複数のお土産を選ぶ。 ※タブレット活用・検索	タブレットを操作する。 複数のお土産を選ぶ。 代金の計算をする。
第４次２時数（10 月上旬） 「調べてみよう」 ① A）学年一斉授業 ② B）班別・個別授業	①活動する施設・活動内容について知る。　※パワーポイント活用 ②動物園の施設を調べ、活動ルートを決定する。 ※タブレット活用 ・検索	①施設内の様子を知る。 活動内容を知る。 ②タブレットを操作する。 見学・餌やりをする動物を選ぶ。
第５次１時数（10 月中旬） 「ルールを確認しよう」 A）学年一斉授業	ホテルでの過ごし方（身支度）、各施設、電車内での過ごし方を知る。 ※パワーポイント活用	ルールやマナーを知る。 自分のすることを考える。
第６次３時数（10 月中旬） 「やってみよう」 ① B）学級授業 ② B）学級授業 ③ A）学年一斉授業	①しおりの記入・色塗り・確認をする。　※しおりの作成 ②リストを見ながら荷物の確認をする。　※荷物の確認 ③係の仕事を確認する。 ※パワーポイント活用	①しおりを作成し、確認する。 ②自分の荷物を確認する。 ③自分の役割の内容を知る。 台詞の練習をする。
第７次２時数（11 月上旬） 「修学旅行の思い出」 ① A）学年一斉授業 ② B）学級・個別授業	①修学旅行を思い出し、振り返る。 ※パワーポイント活用 ②文章・絵などで表現する。 ※映像・写真の選択	①振り返りをし、表現する。 ②文章や絵などで表現する。
校外散歩　２時数×３回	交通安全に気を付けて、整列して校外を歩く。	交通安全を意識する。 列を意識して歩く。

以下の３つの指導方法で、授業を展開していく。

A）学年一斉授業・・・教員がパワーポイント資料を学習内容・ねらいに合わせ提示。

B）学級・個別授業・・・ 児童自身による自己選択・体験的作業。タブレット操作・検索など。

C）個別に配慮を要する児童がいる場合には、適宜適切な活動・目標を設定。（以下参照）

C①）一斉授業では、集中することが難しい児童→学級・個別に再復習。一斉授業の際の、大きな画面や集団授業では視線や集中力などがうまく調節できない場合は、落ち着ける場所や集中しやすい大きさの画面（タブレットや写真など）を活用し、再復習・定着を図る。

C②）初めての場所や活動が苦手な児童→活動の詳細、配置図などを伝える。疑似体験をしたり、ホームページ、ストリートビューなどを活用し、具体的に想像しやすいよう伝えたりする。また、現地でも必要に応じカードを提示や言葉がけをする。我慢ができないと思ったときには教員に伝えてもよいことを伝える。

C③）マナーやルールを守ることが難しい児童→『（展示物は）みるだけです』『しずかにすわります』など、具体的にカードや言葉で確認し、マナーやルール、正しい言葉使いや態度などを伝える。現地でも必要に応じカードの提示や言葉がけをする。

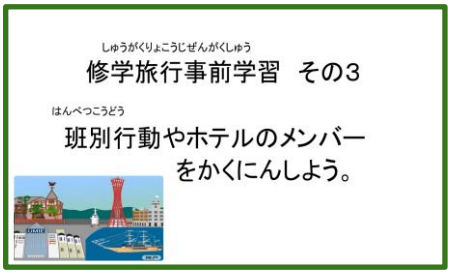
C④）自分で考えたり、確認をすることに課題がある児童→一人で考え、確認できるよう、事前に手伝いすぎないように、周囲の教員や友だちに伝えたり、しおりや時間の確認の仕方を伝えたりする。少しの支援でできるだけ自分で行動できるように見守る。

その他にも、長距離を歩くのが難しい、音や暗闇、長時間待つのが苦手、アレルギーなど活動面や体調面での配慮が必要な児童が多い。修学旅行当日を迎えるまでに、事前に個別に対応し、安心して安全に参加できるように、配慮していく。

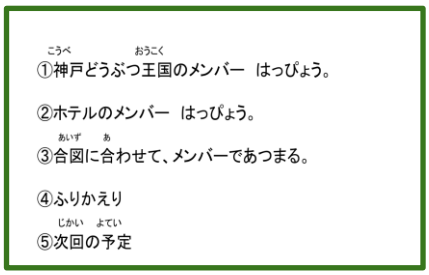
【ICT 活用のポイント】

A）学年一斉授業の場合

・教員からの一方的な提示にならないように配慮する。
・使用するパワーポイント(７種類)の資料は、児童に見通しや期待感を持てるように流れを統一する。（以下参照）



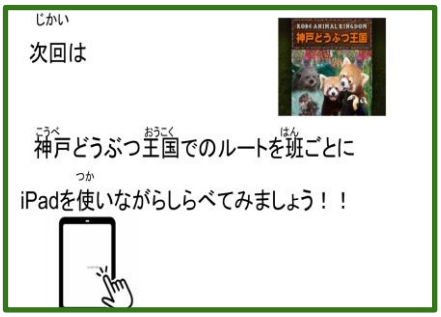
はじめに目当てを発表（図①）



授業の流れを提示（図②）

効果的な仕掛けやゲームなど興味をもてる内容（図③）

振り返りの際に、クイズ形式で確認（図④）



次回の予告（図⑤）

B）学級・個別授業の場合

児童の操作力・理解力に合わせ、タブレットやホームページ検索などの作業手順・支援方法を工夫する。特に、表出言語の少ない児童に対しては、選択・振り返りの場面は、複数の選択肢を用意し、選択肢の提示方法や配置、複数回確認するなどして、本人の意思表示を引き出すように努める。

C） 個別に配慮を要する児童がいる場合
必要に応じ、有効な活用に配慮する。

【結果】

A）の学年での一斉授業の場合では、パワーポイントの提示の仕方を統一したことにより、回数を重ねる毎に、見通しや期待感をもち、集中力・理解力が向上している児童が多く見られた。班や部屋割り、係活動を、繰り返し映像やクイズ形式で発表することで、自分の写真が画面に映った時に笑顔を見せたり、立ち上がって表現したりと、全ての児童が反応を示していた。また、楽しみな内容を各自が発表する場面では、表出言語の少ない児童が、数種類の映像の中から指差しや視線を動かして選んだり、それを見ていた周囲の児童が、代弁したり後日の話題に上げたりする場面があり、意思表示の意識と共に、友だちに対する意識も向上したと思われる。

B）の学級・個別授業の場合では、一斉授業では集中することが難しい児童が、集中しやすいように配慮して、学級・個別に再復習することで、次第に集中力・理解力が向上していく様子が見られた。また、土産決めの活動では、保護者からの事前アンケートで決定している児童には、ホームページから買う物を確認した。画面を見ながら、理解したり、喜んだりする様子が見られた。自分で選ぶ児童の多くは、タブレットを操作しながら、商品や値段を確認しながら、長時間かけて集中して選ぶことができた。また、修学旅行当日にも、土産リストを見ながら、意欲的に買い物をすることできている児童が多かった。

C）の個別の配慮により、修学旅行の取り組みを通して、安心して落ち着いて活動できた児童が多かったように思う。

今回の取り組みを通して、表出言語の少ない児童が、振り返りや選択する方法の幅は広がり、自己表現しようとするようになってきたことが、何よりうれしい変化としてあげられる。

【考察】

学年の多くの児童にとって興味のある修学旅行に向けての取り組みは、今回の児童の主体性を引き出す授業作りの題材としては、適切であったと考えられる。また、主体性を引き出すために、児童に目標や見通しをもてるような教材（本単元では、パワーポイント教材）の提示の仕方や工夫、児童自身の選択・振り返りをする場面での映像やタブレットの活用が、とても有効であったと考えられる。しかし同時に、一斉授業における集中力や理解力、タブレットを操作する際の個人差が大きく、予定していたよりも、個別に対応するための教員の人数や時間が多くかかりすぎたり、タブレットの操作に終始してしまう児童がいたりと課題が見つかった。また、表出言語の少ない児童が、振り返りや選択する方法の幅は広がったが、自分なりに表現している児童に関しての振り返りが、映像を選択するだけに終わったり、理由に込められた思いを聞き取ることができなかったりと逆に幅が狭くなってしまったという課題が残った。

【まとめ】

本学年の教員全員で取り組んだ今回の単元を通し、児童が個々にタブレット端末に触れるきっかけ作りになったように思う。また、選択する機会、友だちと考え行動する機会、タブレットやアプリの操作をする機会を多く設定することで、自分で意思決定することの大切さ、楽しさに気付くきっかけにもなったと考える。今後の課題としては、一斉授業の中での、個別の配慮を取り入れた ICT の活用法。授業内での児童のタブレット使用の拡大。振り返りの際の有効な教材、適切な提示方法、発表する順番など、教員側の授業づくりに関する、たくさんの課題や可能性が見つかった。今後、児童の主体性を引き出す、より良い実践ができるよう検討・工夫していきたい。

【ICT 機器の効果的な活用をめざした授業づくり】

【数学、理科、社会での実践】

【　中学部　藤原慎士　】

【はじめに】

本校に配備されており、活用できる ICT 機器は、Windows 搭載の PC と Apple 製タブレット端末、Android 搭載の電子黒板である。また、各教室にはテレビモニターやプロジェクターが配備されており、資料や映像を拡大して提示することができる。本校は、日常生活の支援ツールや授業での資料の提示や学習活動として活用できる環境がある。しかし、配備されている ICT 機器の OS やアプリケーションの違いから ICT 機器同士の相性が合わず、機能を十分に活かしきれていないことがある。

ICT 機器を活用し、児童生徒の主体性を引き出す授業づくりを実施するには、単元や活動内容、目標を達成するために合う ICT 機器を選択し、主体性を引き出すための働きかけができたのかを検証する必要がある。筆者は、中学部のかず・せいかつを担当している。実践した内容を教科別に振り返り、ICT 機器を使った活動から主体性を引き出す方法を検討したい。

【授業の概要】

1. 対象生徒　中学部２年生　C1 及び C2 班（計 17 名）
2. 授業名
   ①　数学
   (ア) 形を組み合わせて、形や立体を作ろう
   ねらい：図形に関する数学的な表現を身に付け、図形をかいたり組み立てたりすることができる。
   ②　理科
   (ア) 季節の植物を観察しよう
   ねらい：季節の植物を観察する技能を身に付け、季節によって植物が変化することに気付くことができる。
   ③　社会
   (ア) 身近なルールやマナーを知ろう
   ねらい：公共施設のルールを知ったりマナーについて考えたりすることができる。
   (イ) 社会科クイズをしよう
   ねらい：日常生活で得た知識を活用し、発表することができる。

【授業の内容と経過】

①　数学

・形を組み合わせて、形や立体を作ろう

内容と経過

１次「形を捉えて、性質を知る。」

形を捉えるために、身近にあるものの形を探して iPad のカメラ機能で撮影し、友だち同士で発見したものを共有した。教室にある三角や四角、丸を見つける活動をすることで形について関心を持って活動に取り組むことができた。

次に、教員が準備した図形を振り分ける活動に取り組んだ。図形を振り分けることで三角と四角、丸の違いについて考えることができた。

２次「図形をかいたりつくったりする。」

折り紙や竹ひごを使って、形を作る活動に取り組んだ。実際に操作しながら形を作ることで直角や辺、直線など数学的な知識を育むことができた。また、視覚的に捉えられるように PowerPoint のスライドショーを用いて用語の説明を行った。

アプリ「geoboard」を用いて図形をかく活動に取り組んだ。提示された形を模倣したり課題に合った形をかいたりすることで考える力を育むことができた。本単元で学んだ用語や知識を活かして主体的に学ぶ様子があった。

② 理科

・季節の植物を観察しよう

内容と経過

１次「植物を撮影しよう」

iPad のカメラ機能を用いて、校内に自生している植物や畑で育てられている植物の撮影をした。季節ごとに植物を撮影することで、季節によって咲いている花が違うことを知ったり植物の成長を観察したりすることができた。

２次「植物の名前を調べよう」

植物の名前を調べるために、撮影した植物の写真を「Google 画像検索」で検索したり図鑑と見比べたりする活動に取り組んだ。普段の生活で気にしていない雑草に注目し、「カタバミ」や「ハルジオン」の名前を知ることができた。また、撮影した植物は、Pages のテンプレートを活用して観察記録としてまとめることができた。季節ごとにまとめることで、季節によって植物の変化があることや成長することを知ることができた。

③ 社会

・身近なルールやマナーを知ろう

内容と経過

１次「交通のルール、乗り物のマナーを知ろう」

Keynote のスライドショーを活用して歩行者用信号機を提示し、横断歩道を渡る体験を間接的に行った。スライドショーで信号が赤色になっているとき、点滅しているとき、青色になっているときを再現し、信号に従って行動することができた。日常生活の中でも信号を意識して見ることが大切であると知ることができた。

プロジェクターとホワイトボードを活用し資料を拡大提示してマナー違反探しに取り組んだ。プリントの資料からマナー違反を見つけ出し、見つけたものを全体で共有をした。自分の意見を伝え

たり友だちの意見を聞いたりすることで、いろいろなマナーについて気付くことができた。

２次「公衆浴場のマナーを調べよう」

宿泊学習での入浴に関連して、検索機能を使用して公衆浴場のマナーについて調べる活動に取り組んだ。入浴のマナーに関するポスターを見つけて情報を読み取り、マナーに関することを学ぶことができた。

・社会科クイズをしよう

内容と経過

Keynote のスライドショーを活用して「日本」「外国」「公共」「防災」に関するクイズに取り組んだ。プロジェクターをホワイトボードに投影し、答えの部分が空白になっているところに答えを記入する活動や答えになる写真をホワイトボードに貼り付ける活動をした。全体で取り組むことで友だちの意見を参考にして考えることができた。

また、一緒に活動することで学習する意欲を高め合うことができた。「日本」のクイズでは、日本の地名や名所に関する内容を学習した。居住地である大阪についてのクイズでは、日常生活で体験したことや経験したことを活用してクイズに答えることができた。「防災」のクイズでは、防災訓練で学んだ知識や経験を活用してクイズに答えることができた。

【ICT 活用のポイント】

「iPad アプリや WEB サイトを使用して学習する」

個別の学習の場面で、１人１台 iPad を使用して学習に取り組むことができる。また、一斉指導の場面で、電子黒板の WEB サイトを使用し、操作の方法や考え方を共有することができる（図１）

「形を組み合わせて、形や立体を作ろう」では、アプリ（geoboard）を使用して図形をかく活動に取り組んだ。電子黒板でアプリの操作方法を指導し、課題に合う形をつくったり形を使った模様づくりに取り組んだりした（図２，３）。

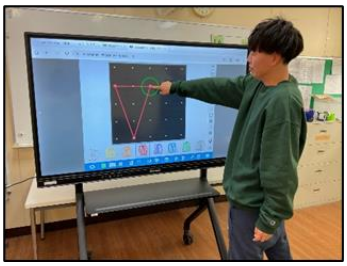


図 1．電子黒板の操作

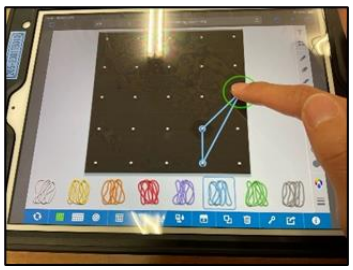


図 2．アプリの活用図

図 3．学習の成果

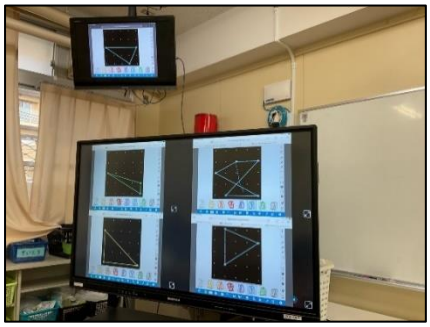


図 4．画面共有

「電子黒板を使用して学習活動の様子を共有する」

生徒が使用している iPad を電子黒板に画面共有して、全体の学習活動の様子を共有することができる（図 4）。活動に応じて１つの画面に焦点をあてることができる。また、生徒の活動の様子を見ることができ、指導支援が必要な場合はすぐに気付くことができる。「形を組み合わせて、形や立体を作ろう」では、

三角形をつくろうや同じ形をつくろうなど活動で電子黒板を使用した。その際、活動の流れや手本は教室にあるモニターに提示した。

「Android 端末のアプリを電子黒板に写して、タッチ操作をする」

図 5. Android 端末と接続

Android 端末のアプリを電子黒板に写すことで、大画面で操作し考え方や学びを共有することができる（図５）。Android 端末には学習アプリが多くあり、活用することで生徒の興味関心を引くことができ学習意欲を高めることができる。

「お金を計算しよう」では、お金を数える力を育むために、アプリ（おかねのけいさん）を使用した。このアプリは、提示された金額を見て、硬貨や紙幣を操作して、トレイに移動させることができる。正解すると花丸のイラストや BGM が流れるので楽しみながら活動ができるアプリであった。また、難易度が調整できるので１人ひとりの課題にあった学習ができる。１人ずつ順番に取り組むことになるが、大画面で表示されていることで友だちが考えている様子を見たり、自分だったらと考えたりすることができた。

「Word や PowerPoint を電子黒板に写してタッチ操作や書きこみをする」

電子黒板とパソコンを接続することで、パソコンの画面を電子黒板のモニターに映し出すことができ、タッチ操作が可能になる。Word や PowerPoint で自作した教材を電子黒板に写すことで、教員が書く場所を視覚的に示したり生徒が画面を操作したりすることができた。配布したプリントを電子黒板に写すことで、記入する場所や答えが視覚的に捉えることができ意欲的に活動に取り組むことができた（図６）。また、生徒は画面に触れて操作ができることで、「自分もやってみたい」と主体的に取り組む姿勢が見られた（図７）。

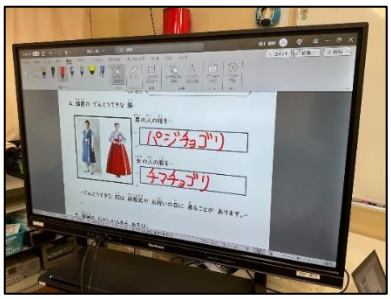


図 6. 書き込み

図 7. タッチ操作

「iPad で撮影して調べ学習をする」

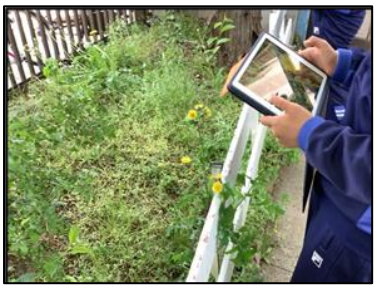


図 8．植物観察

iPad は持ち運びが容易であり、カメラ機能があるため記録を残すことができる（図８）。また、校内であればネットワークが繋がっているためどの場所でも調べることが可能である。「季節の植物を観察しよう」では、植物の観察をするために、iPad を１人１台ずつ持って校内の植物を撮影した。事前に撮影の仕方やアングルを伝えることで、ねらい通りの植物を撮影することできた。植物の名前を調べるために、「Google 画像検索」を使用した（図９）。画像を使って簡単に検索することができるため、小さい花や雑草などにも興味をもって撮影しようする姿あった。

調べたことをまとめるために、アプリ（Pages）を使用した。教員が自作したテンプレートを活用することで（図 10）、観察して調べたことを季節ごとにまとめることができた。また、まとめたものを印刷しファイルに綴じることで季節ごとに振り返りができる（図 11）。

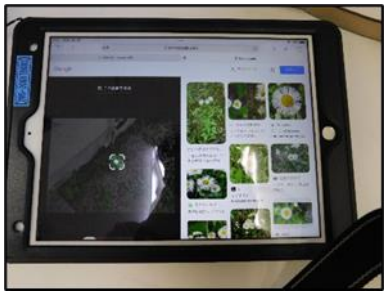


図 9．　画像検索

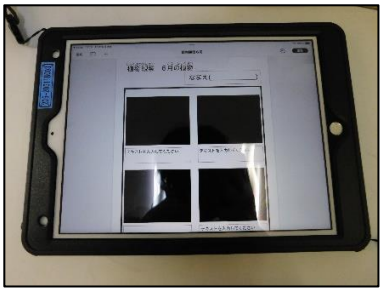


図 10．テンプレート

図 11．学習の成果

「Google マップの活用」

図 12．Google マップの活用

Google マップを活用することで、街や公共の様子を知ることや地理的な学習ができる（図 12）。

「身近なルールやマナーを知ろう」では、道路の様子を提示し、歩道のある道やない道などを確認し、安全に通行できる場所を学んだ。日常生活で使用する道路を提示することで、興味関心をもって学習に取り組むことができた。

「プレゼンテーションソフトを投影する」

プレゼンテーションソフトを用いることで、用語の説明や資料を拡大提示することができる。ホワイトボードに投影することで、絵カードを張り付けることやペンで書きこむことができる。

歩行者信号について学ぶために、自作した信号を投影した。また、教室の床に白テープを張り付けて横断歩道を再現し、信号を見て横断する学習に取り組んだ。信号を大きく提示し、青信号のときはメロディを流し、青信号から赤信号に変わるときは点滅させた（図 13）。

交通ルールを守るために、間違い探しの資料を提示した。交通ルールを守っていないイラストに印を付ける活動に取り組んだ（図 14）。

サイレンを鳴らす車について学ぶために、スライドから流れる音声を聞く活動に取り組んだ。サイレンを聞き分けて、正しい車を選ぶことができた（図 15）。

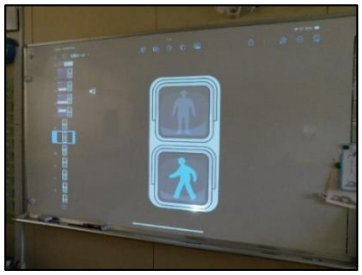


図 13．歩行者用信号機

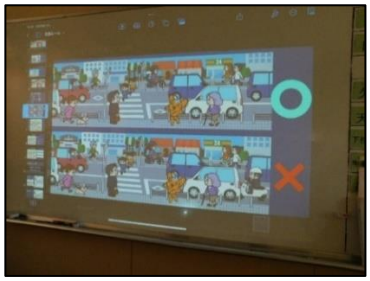


図 14．間違い探し

図 15．音が鳴るクイズ

【結果】

ICT 機器を用いることで、個別の課題や友だちと一緒に学習活動に取り組むことができ、生徒の主体性を引き出すことができた。

個別の学習として ICT 機器を活用したのは、「iPad アプリや WEB サイトを使用して学習する」や「iPad で撮影して調べ学習をする」、「Google マップの活用」などである。一人ひとりがタブレット端末を操作することで、自分のペースで学習を進めることができ、理解を深めることができた。そして、個別の学習を取り組んだ後には、活動の進捗状況や達成度を個人で振り返ったり全体で共有したりすることで、活動の取り組みに対する意欲が高めることができた。

友だちと一緒に学ぶために ICT 機器を活用したのは、「電子黒板を使用して学習活動の様子を共有する」や「Word や PowerPoint を電子黒板に写してタッチ操作や書きこみをする」、「Android 端末のアプリを電子黒板に写して、タッチ操作をする」、「プレゼンテーションソフトをホワイトボードに投影する」などである。単元の用語の説明や課題など共通の認識を持つことができ、学習活動をスムーズに進めることができた。また、大きな画面を見て友だちの様子を見守ることで、見通しをもち自分だったらと考えることができていた。前に立ってクイズに答えることやアプリに触ることに自信がない生徒であっても、友だちの様子を見て活動に取り組むことができていた。難しかったり困っていたりしていたときは、友だち同士で声を掛け合って力を合わせている様子があった。

【考察】

ICT 機器の効果的な活用をめざした授業づくりのため、単元の目標に合わせていろいろな ICT 機器を活用するようにした。

教員が生徒に対して一斉指導や説明をする際は、プレゼンテーションソフトを使用した。スライドショーの提示は、どの教科でも効果的であると考える。なぜなら、文字や写真などの資料を提示すると理解が深まり、スムーズに学習活動に取り組むことができるからである。ただし、一方的な説明ばかりにならないように、説明の途中で生徒が活動できるような授業展開をする必要がある。

スライドショーは、提示方法によってできる活動が異なる。例えば、ホワイトボードに投影する場合は、スライドに合わせて写真カードを貼り付けたり書いたりすることができる。この活動は、カードの移動ややり直しが容易であり、友だち同士で考える活動に向いていると考える。電子黒板に写した場合は、タッチ操作が可能になり、選択したり書きこんだりすることができる。ただし、iPad を電子黒板に接続してもタッチ操作ができないため、PC や android 端末で接続する必要がある。

生徒の活動の様子を共有する際は、電子黒板を用いて８つの画面共有を行い、お互いの活動の様子

を見られるようにした。画面を共有することは、個別の学習や調べ学習などに活用することで効果があると考える。なぜなら、画面共有をすることで、教員は進捗状況を見ることができ、状況をすぐに把握することができる。生徒は、他の生徒の画面を見ることができ、考え方を参考にする様子が見られたからである。

ただし、画面共有できる数が現時点で最大９画面であることや iPad で動画が再生されると再生している画面がピックアップされ、その他の iPad の共有が強制的に解除されることなど、機能面が制限されることがあるため、学習活動によっては合わないことがある。そのため電子黒板と iPad でできることを事前に調べておく必要がある。

【まとめ】

今回は、実践的に ICT 機器を用いて授業を実施した。学習活動やねらいに合わせて、アプリケーションや自作教材を用いることや活動の内容で、生徒が主体的に学ぶためのアプローチが多くあることが分かった。また、いろいろな ICT 機器を扱うことで、できることやできないことが明らかになり、授業計画を立てる上での参考となった。今後も新しい ICT 機器や機能が増えた機材が多くなってくると予想される。ためらわず、使っていくことが大切であると気付くことができた。

また、今回の実践では率先して ICT 機器を活用してきたが、実際に触ったり組み立てたりすることも大切であると考える。主体的に学ぶためには、興味や関心を持つことから始まると考えている。日常生活や学習活動の中で、体験したり経験したりすることで興味や関心をもつこともある。そのために、学習活動の中では、直接体験する場面と間接体験する場面を上手に扱っていきたいと考えた。

【「教育」から「学習」へ～ＩＣＴを活用して～】

【中学部　山川　了】

【はじめに】

本校中学部では、習熟度別に班編成が行われ、週１回程度英語の授業が展開されている。英語には興味関心が高い生徒も多いが、英語の音声が聞き取れない、英語表現の理解、スペルの読み書きなど、母国語よりも学習に対するハードルは高い。また、障がいの状況も関係し、様々な学習上の困難さも見られる。さらに、文部科学省（２０１５）「文部科学省所管事業分野における障害を理由とする差別の解消の推進に関する対応指針」として、“子供である障害者または知的障害、発達障害、言語障害等によりことばだけを聞いて理解することや意思疎通が困難な障害者に対し、絵や写真カード、コミュニケーションボード、タブレット端末等のＩＣＴ機器の活用、視覚的に伝えるための情報の文字化、質問内容を「はい」又は「いいえ」で端的に答えられるようにすることなどにより意思を確認したり、本人の自己選択・自己決定を支援したりすること。”※1とあり、ICT を活用することで、生徒の特別支援ニーズを満たし、個別に必要かつ適切な環境の調整、変更を促し、学びの機会を保証するアプローチを行った。また、授業のユニバーサルデザイン化や生徒の動機づけを高めることで、主体的に課題に取り組めることを促進できるように授業をデザインした。

【授業の概要】

１）対象生徒　中学部１学年　C1、C2班（14 名）

２）授業名　英語

・What do you like？

・自分の行ってみたい国を紹介しよう！

・Post on Ikusutagram!

３）日時　令和５年度　１、２学期

【授業のねらい】

１）対象生徒の実態と課題

当グループの生徒は全員口頭でのコミュニケーションが可能な生徒たちであるが、障がいの状況も関係し、学習技能における得意なこと、不得意なことにそれぞれ差が見られる。また、

・書きに困難があり、整った字を書くことが難しい、書こうとしない。

・読みに困難があり、読むことへの抵抗感が大きい。

・コミュニケーションに苦手さがあり、自分の思いを言葉にしたり、周囲と思いを伝え合ったりすることができにくく、時に激しい不適応を起こす（井上、2016、P９１）。といったような学習面、行動面において困難を示す実態が見られることがある。また、ソーシャルスキルの未熟さや認知特性の違いも目立つため、学習活動や教材が言語的な活動など、一部に偏ってしまうと課題の難易度や学習に対する困難さ、モチベーションが続かないといったような状況が見られる。教室に紙と鉛筆以外の方法が用意されていない場合は、「読めないし、書けない」ことが当てはまり、印刷物や鉛筆の利用に困難のある生徒は、自然と教室での学びから排除されていってしまう（近藤、2016、P5）。上記は肢体不自由上の理由、学習障害等も含んでいるが、英語学習に置いては、特別支援教育に限らず、これらと類似した状況も多く見られ、学習における困難さがより顕著になる。こういった困難さ

を ICT を活用し、授業のユニバーサルデザイン化、基礎的環境整備、合理的配慮を行うことで、機能代替アプローチを獲得し、自ら学び生きる力を獲得させたい。

２）授業の目的・目標

障害のある児童生徒にとってのＩＣＴ活用の目的は明確である。その１番目は「機能代替を目的とした、障害による困難を補う活用」そして２番目は「機能回復を目的とした、トレーニング的活用である」※2（太田、２０１６、P３４）。上記の生徒実態、これらを踏まえ、授業では以下の点を重視し、ICT を活用した授業デザインを試みた。

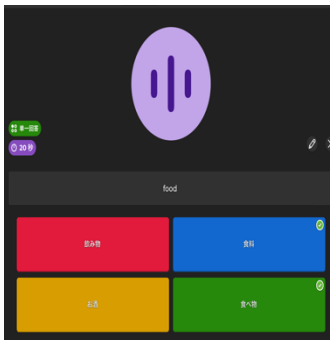
・合理的配慮、基礎的環境整備、授業のユニバーサルデザイン化
・機能代替アプローチ提示による多様な学習方法、学びの保障
・個別の特別支援ニーズを満たす
・ゲーミフィケーションによる意欲、主体性、自己効力感の向上
・ＩＣＴを活用することによる、授業や業務の効率化及び負担軽減

【授業の内容と経過】

３）教育用クイズアプリ「Kahoot!」を活用して

授業では教育用クイズアプリ「Kahoot!」を多用し、授業を展開した。クイズ形式で授業を展開でき、個別学習、グループ学習、一斉学習と多様な学習形態が展開できる。さらに Kahoot!の機能を活用した学習上の困難さへの対応や様々な機能として、以下が挙げられる。

◎読むことへの困難さへの対応



英語のスペルを読むことに困難さが生じていたが、音声の読み上げ機能があるため Kahoot!での学習では、英語の音声を聞き、学習を行うことができた。また、画像やイラストはもちろん、動画の挿入も容易に行うことができ、視覚的な支援としても抜群の効果が見られた。

◎理解や意思疎通への困難さへの対応

ベーシックな問題として、○×問題、４択問題による選択性の問題作成が可能である。○×や４選択式の端的な質問であり、意志の表出がしやすいため、障がいの特性にも対応し、比較的容易に課題にチャレンジすることができ、自己選択、自己決定の支援としても有効であった。

◎考えをまとめることでの困難さへの対応

ワーキングメモリが少ない生徒など、ことばだけの情報ではなかなか思考が整理できない場合でも、図に示したり、文字化したりすることで自分の考えを整理することが可能になる。投票機能や尺度を表現するスライダー機能を活用し、自分の考えや意見を表現でき、また、操作的な活動を通して、体験的に数や量についても学習や解答を表示することができた。

◎多様な学習形態

一斉スタイルによる個別での学習参加はもちろん、多様な形での学習参加が可能となる。チーム対抗での学習モードや全員で協力しながら問題を解き、ゲーム感覚でクリアしていくことができるモード、グループでディスカッションなどの協働をしながら問題にチャレンジするモードでの学習形態の構成が可能であり、多様な学習形態による効果的な授業展開を行うことができた。

◎書くことへの困難さへの対応

短答式の機能を使い、英単語の入力練習を行った。アルファベットを書くという作業は形をとらえることが難しい場合、負荷が大きいが、入力という**機能代替アプローチ**を用いることで英単語のインプット練習が書くという作業から入力になり、容易になった。また、スワイプ機能で解答を並び替えて答える機能では、英文作成や曜日を順番に並べる問題などで活用した。英文作成では、単元の最初に「What food do you like ?」などの キーセンテンスを学習した後 Kahoot!を活用し、知識の定着を図った。また、❶日本語→英単語　❷英単語→日本語　❸英文→日本文　❹日本文→英語文並び替えとスモールステップで学習を行うことができた。中学校１年生の定期テストに出てくるような英文の並び替え問題も、操作による反復的な学習で、英単語を並び替えてターゲットセンテンスの英文が作成できるようになった。紙と鉛筆では、困難が予想される学習がＩＣＴを活用することで、基本的な知識を比較的容易に習得し、定着させることができた。また、上記の考えをまとめることへの困難さにも同様に対応している。

4）自分の考えをまとめる、表現する。

◎「行ってみたい国を紹介しよう！」

タブレット端末を活用し、自分の行ってみたい国の調べ学習を行った。調べた国をスライドにまとめ、他者に紹介する活動を行った。ここではタブレット端末を、**❶検索ツール　❷思考ツール　❸表現ツール　❹コミュニケーションツール**　として活用した。情報の取得、知識の習得や紹介のために必要な情報の整理を行い、目的・場面・状況の設定を行なった。他者意識や学習活動の目的を明確に提示し、プレゼンテーション活動を通して表現する場面を設定することで、生徒の主体性を引き出すことを意識した。また、授業では、生徒たちが「先生、ＢＧＭも入れたい！」と自ら工夫し、楽しんで取り組もうとしたり、アニメーションを添付し、より効果的なスライドを作成しようと試行しながら取り組む様子も見られた。また、操作方法について生徒同士で質問、教え合うなど協働して学習する姿も見ることができた。

●「Post on Ikustagram!」

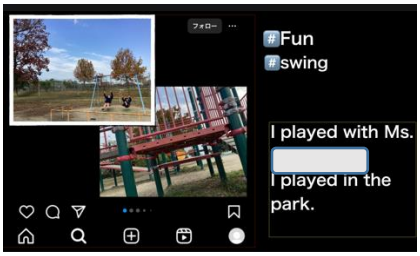
人気ＳＮＳツール、インスタグラムに英語で投稿するという疑似体験を行った。

◎写真撮影

iPad のカメラ機能を活用し、校外に出かけた。秋晴れの気持ちいい気候の中、秋をテーマにそれぞれが好きな写真を撮影した。写真活動は、撮るだけであれば、身体的な難しさを持っている生徒以外は全員が取り組みやすく、また即座に成果物（写真）が得られるという点で意欲を掻き立てられやすい。一方でよい作品を撮っていくためには、深く考え、友の行為や作品からもたくさん刺激を受けることが大切であり、協働的な学習としても成立しやすい（石川 2014、P５６）。実際の撮影では、友だちに「一緒に撮ろう」や「ここでポーズしてるから撮って！」と自ら考え、工夫したり、カメラを向けることで自然と撮影によるコミュニケーションや協働する様子が見られた。

◎Ikusutagram 作成

インスタグラムのテンプレートを模倣したスライドに撮影した写真、ハッシュタグやコメントを自分で考えスライドにまとめた。文や文章で考えることや表現することに苦手意識のある生徒もいたが、自分で撮影した写真を思考の補助とし、ハッシュタグを考えることで、ハードルを下げて表現することができた。さらにハッシュタグやコメントを Google 翻訳を使い、英語に翻訳をし、自分で英語での表現や音声について学習を行った。



【ICT 活用のポイント】

●合理的配慮、基礎的環境整備、授業のユニバーサルデザイン化

・読み書きへの困難さは、機能代替アプローチ提示による多様な学習方法、学びの保障。
・アクセシビリティ（支援技術）の標準的活用。
・英語の音声を聞きながら学習できる。（読みの困難さに対応）
・操作的な活動ができる。（書きの困難さに対応）（能動的学習）
・検索ツール　思考ツール　表現ツール　コミュニケーションツールとしてのＩＣＴ活用。
・個別の特別支援ニーズを満たす。
・生徒の強み、認知特性にフォーカスする。
・インプットとアウトプットが同時にできる。

●学習や業務の効率化及び負担軽減。

・課題作成が比較的容易である。
・既存の問題を活用することも可能。
・学びのハードルが下がる。
・失敗に対するハードルが低い。

【結果】

ICT を活用し、以下の学習効果及び、教員、生徒への双方のメリット、効果が挙げられる。

・「Learning by doing」という言葉があるように、教師の話す、説明する時間、生徒の聞く時間を減らすことで、生徒が活動する時間を多く確保し、より生徒が体験的に学習できるようにした。
・授業中に手持ち無沙汰になる、興味が持てないことで不適切な行動が誘発される場合があるが、そういった行動は基本的に見られなかった。
・プリントでは、何度も取り組むことが難しいが、タブレット端末を活用することで復習など、何度も自身で課題に取り組むことができた。
・口頭でのコミュニケーションやプリント学習では、課題が見られる生徒がタブレット端末で学習を行うと高いパフォーマンスを発揮することが多々見られた。
・ゲーム性のある課題を多く取り入れたことで、授業での生徒の反応として、「楽しい！」「もっとやりたい！」「最初はわからなかったけど、繰り返しやったらできるようになって嬉しい！」と意欲的、肯定的な発言が多く見られ 、主体性や自己効力感の向上が見られた。

【考察】

・ICT やアプリを活用することで、学習へのハードルが下がり、意欲的に学習に向かう姿勢が多く見られた。また、Kahoot！での基本的な知識の習得、定着には、大いに有効であった。得点や結果が即表示され、理解度や苦手な点が可視化できるが、個別のフォローアップやステップアップについては、より具体的に再考したい。また、単元計画にも効果的に組み込み、今後も引き続き活用していきたい。

・ICT を活用し、基礎的環境整備や授業のユニバーサルデザイン化、合理的配慮は一定行うことができ、多様な学習方法の提示や生徒の学びやすさの土台は整えることができたように思う。一方で、生徒がより主体的に学習に向かうための「学習の個別化」や「個別最適な学び」には、到らなかった。今後も従来の授業観を再考し、生徒に学習を委ねることについて、アプローチを重ねていきたい。

・「自分の行ってみたい国を紹介しよう！」「Post on Ikusutagram!」で、生徒が主体的に課題を解決するための「課題設定学習」を実施することはできたが、生徒たちが自ら探究、追求したいと思えるようなミッションにするための課題の投げかけ方や学習成果物の在り方については、具体的なプロセスやデザインがまだまだ不足していると感じた。

【まとめ】

今では教員がパワーポイントやKeynoteなどのスライドを用いて授業を展開するのが一般的であり、GIGAスクール構想の推進により、生徒たちが個々に端末を駆使して学ぶ光景も増えてきた。自分の授業でもスライドや画像、動画などの提示をしないことはなく、ほぼ毎時間生徒がタブレット端末を授業で使用し、学習に取り組んでいる。普段発話が少なく、授業に興味が持てない生徒も、スライドを見ると「今日の予定は・・・！」と自発的に声に出し集中する姿や、上記にも書いたがタブレット端末を使った学習では、高いパフォーマンスを発揮するなど、紙と鉛筆だけでは活躍が期待できなかったような様子を多く見ることができた。しかし、ＩＣＴはあくまでも手段であり、目的ではない。これまで生徒との活用を通して、より効果的な使用方法やもっと多様な学習や活動の重要性を感じることも多くあった。生徒が必要とする力や課題を明確にし、生徒たちが必要性を感じ、やってみたいと思える活動や学習環境を整え、自ら学習に向かうことができるよう、今後も研鑽を重ねていきたい。

※１、２：原文の表記が、「子供」、「障害」となっているため、ここではこのような表記とする。

【参考文献】

稲垣　忠　編著（2020年）探求する学びをデザインする！　情報活用型プロジェクト学習ガイドブック
近藤　武夫　編著（2016年）学校でのICT利用による読み書き支援（５、３４、91）
佐々木　潤（2022年）個別最適な学び×協働的な学び×ICT入門
涌井　恵　編著　（2014）特別支援教育とアクティブ・ラーニング　～一人ひとりの違いを活かす通常学級での教え方・学び方（５６）

【主体性を高める体育授業】

（ICT 機器を含めた教材・教具の工夫）

【高等部　１年　体育科】

【はじめに】

本単元では、ニュースポーツを題材に取り上げる。ニュースポーツは、一般的に競い合うという面よりも、簡単なルールで誰もが楽しめるようにという目的で新しく考案されたものである。本校に通う児童生徒にとっても、高い技術力を求められるような種目ではないニュースポーツがスポーツと関わったり、親しみをもって取り組むことができる入口になりやすいと考え、授業に採用している。中でもキンボールは、助け合いや協調性を高めることを大切にするスポーツであり、比較的大きな動作による運動になり、技術の高低が出にくいスポーツである。そのため、できたことに対しては、積極的に褒めあい、「自分はできるんだ」という達成感をもって取り組める工夫を取りいれて、今後の意欲向上につながる授業にしていきたいと考えた。

【授業の概要】

①対象生徒：高等部１年　４班　16 名

②授業名　：「ニュースポーツをしよう（キンボール）」

③期間　　：令和４年 11 月（計６時間）

【授業のねらい】

高等部１年生全体の中で運動能力・認知能力・コミュニケーション能力等を参考に４段階のグループで編成したうち１番段階の高いグループを対象としている。ただし、本グループにおいても運動に関して、新体力テストの結果から好成績を残す生徒は少ない。しかし、自分の考えを仲間に伝え、話し合って作戦を立てるなど、運動を楽しむ意欲が高く、仲間と協力する楽しさや喜びを感じながら授業参加する生徒が多いのが特徴の１つなので、ルールや教材・教具を工夫し、生徒の主体性を引き出すようにしていきたい。

本グループの生徒は、ほとんどがキンボールをプレーしたことがない。また、ボールに対して恐怖心をもっていたり、球技を苦手としたりしている生徒が見受けられる。そのため、本単元では、そういった生徒たちに合わせて、動画を見ながらキンボールという競技の理解を促すことや、ボールのサイズや素材などを変えて、恐怖心を取り除き、ヒット時やキャッチ時の体の使い方や姿勢を学ばせていき、ゲームにつなげていけるように考えた。

【授業の内容と経過】

本単元は計６時間で構成していく。１時間目は競技のルール説明や用具の紹介など、動画を見ながら行った。その後の２時間目に、早速ゲームを行った。その狙いとしては、まずは初体験の競技でゲームのイメージをつかむことが授業参加の意欲向上につながると考えるとともに、生徒の技量の把握

を兼ねる意味合いもあった。ゲームを行い、教員はもちろん、生徒も課題を理解した中で、３、４時間目はボールをヒットもしくはキャッチする練習を行った。その練習の中で、身体の使い方について、手本やコツを示すことで、動作を改善することにつなげていきたいと考えた。また、キャッチする練習の際には、ビーチボールを用いて、素早くボールの落下地点に入る練習を行った。その後、まとめの意味合いも込めて、再度ゲームを行った。

時	学習内容	学習活動
１－２	・ルールを学ぶ。 ・ゲームの中でボールに触れあう。	・ルール説明 ・ゲーム
３－４	・ボールの打ち方を学ぶ。 ・ボールのキャッチの仕方を学ぶ。	・ヒットする練習 ・キャッチする練習
５－６	・ゲームをする。	・ゲーム

【ICT 活用のポイント】

キンボールをプレーしたことがない生徒がほとんどの本グループにおいて、ゲームイメージをもたせることがより主体的にゲーム参加できる要因になるのではないかと考えた。また、インターネット上にキンボールの普及のため初心者向けの動画が投稿されており、それを利用した。本校体育館には、プロジェクターと大型のスクリーンが整備されており、動画を視聴した後、すぐにプレーに移ることができるのが大きなメリットである。

【結果】

動画を視聴したうえで、ゲーム①→トレーニング→ゲーム②の流れにすることで、より生徒たちが主体性や具体性をもって、授業に臨むことができた。ゲーム①で課題として出た「キャッチ」の練習をビーチボールで行うことで、ヒットする前に、打者を観察し、落下地点を予測したポジショニングや一歩目の素早さが身についた。ゲーム②では、その付加的な効果として２人目以降の守備者のボールへの素早い集合がみられるようになった。

【考察】

今回のような、教員が実際の見本を示すことが難しい場面では、動画を利用する効果がとても大きく感じた。また、動画を視聴した後すぐにゲームを行うことで、より意欲的に取り組むことができたと感じる。

技術的には、ビーチボールを使った練習が効果的であったと感じる。打者の様子を観察し、そこからどこにボールが飛んでくるかを予測することは、思考・判断の部分を養うことができ、ほかの競技にも生かすことができるとも考えられる。また、技術や運動能力が高くなく、体育授業に自信のもてない生徒に関しても、自発的に行動することが増えたと思われる。

【まとめ】

授業を行ったグループは冒頭に示した通り、運動を楽しむ意欲が高く、仲間と協力する楽しさや喜

びを感じながら授業参加する生徒が多いことが特徴である。今回のような ICT 機器の活用や教材・教具の工夫は、生徒の主体性や授業の具体性を引き出すために、不可欠であると考える。このように計画・実施した本単元は生徒の積極性を大きく引き出すかたちとなり、生徒もいい表情で全６回を終えることができた。また、本単元が終了後にも「またキンボールがしたい」という声が多く聞かれ、その後の体育授業にも積極的に取り組む生徒が増えたことも印象的である。ひとつの成功体験が、自信につながり学校生活全体にいい影響を与えるものだと私自身実感することができた。今後も生徒がたくさんの経験を積み、自信をつけて学校生活を送ることができるよう、授業を計画していきたい。

【気持ちを合わせて演奏しよう】
【器楽合奏「島人の宝」】

【高等部１年　音楽科】

【はじめに】
本グループは音楽が好きな生徒が多く、これまで行った合唱やボディーパーカッション、ハンドベルなどの活動に前向きに取り組んできた。しかし、それぞれが自分の演奏を楽しむにとどまることが多いのが現状である。そこで今回、音楽表現での課題を意識し、自ら工夫して取り組めるような授業づくりがしたいと考えた。

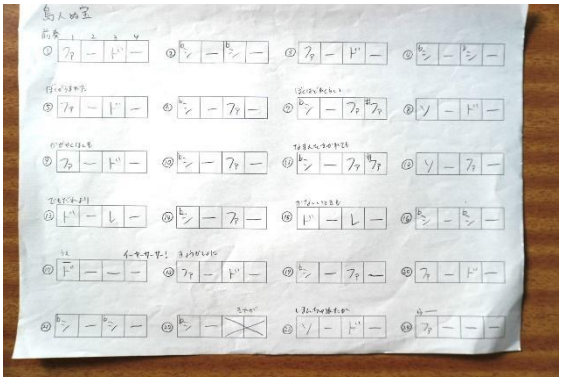
【授業の概要】
１　対象生徒：高等部１年Ｃ班（９名）
２　授業名：「気持ちを合わせて演奏しよう（器楽合奏）」
３　期間：令和５年 ９月～10 月（計 12 時間）

【授業のねらい】
本単元では、①「正しい音とリズムで演奏できる」②「周りとテンポを合わせ、全体のまとまりを意識して演奏できる」③「より良い音楽を目指し、主体的・協働的に取り組もうとする」を主なねらいとした。目指すところを明確にする為に、演奏を録画して鑑賞し、次回の目標を設定するという活動を新たに取り入れた。自己の学習を振り返り、調整しながら進めていくことで、より主体的な学びに繋げていきたいと考えた。
また、生徒の希望を考慮しながら、実態に合わせてパートを振り分けることで、前向きに取り組めるようにした。パートは、リズムパート(パーランクー・シェイカー・タンブリン・カホン) と、メロディパート (キーボード・木琴・鉄琴・グロッケン)の２つに分けた。リズムパートはやさしいリズムで作成し、メロディパートはより発展的な構成にした。
楽曲は「島人ぬ宝」を選曲した。21 年前にリリースされた楽曲だが、多くのアーティストにカバーされ、幅広い世代に親しまれている。そのため、生徒たちにも聴き馴染みがあり、興味を持って取り組めると考えた。また、ゆったりとしたテンポで皆で合わせて演奏しやすいことから、合奏に適していると考えた。

【授業の内容と経過】
①個人練習
まずそれぞれが演奏するリズムや旋律を理解できるように、カードや楽譜を使用しながら練習を行った。その後、基準となるテンポを掴むため、リード音源に合わせて演奏をするという形で練習を続けた。

リズムパートで使用したリズムカード

メロディパートで使用した楽譜



②パート・全体練習
その後、互いを意識できるようパートごとや全員で合わせる練習を行った。周りとテンポを合わすことができるよう、言葉かけをしながら繰り返し取り組んだ。

③振り返り
タブレット端末で録画した演奏を鑑賞する時間を設けた。感じたことを共有し、互いに評価し合い、次の目標を設定した。

全１２時間

時	学習内容	指導の手立て
1	・「島人ぬ宝」を鑑賞する。	・テレビ画面に注目し、集中して聴くよう言葉かけをする。 ・聴きながら簡単なリズム打ちを行い、ゆったりとしたテンポを掴めるようにする。
2 3 4	・担当する楽器の演奏の仕方を確認する。 ・個人練習を行う。	・模範を示し、正しい奏法で鳴らせるようにする。 ・リズムカードを用いたり、楽器に目印をつけたりして、演奏しやすくする。 ・拍を数えたり、手で叩いたりして正しいテンポを示す。
5 6 7 8	・パートごとの練習、全体練習を行う。	・正しいリズムと音で演奏できているかを確認する。 ・手本を示したり、リズムカードを提示したりする。 ・指導者のカウントや、音源に合わせて演奏できるよう言葉かけをする。
9 10 11 12	・タブレット端末で演奏を録画して鑑賞する。感じたことを共有し、次の目標を設定する。	・周りを意識しながら、テンポを合わせて演奏できるよう言葉かけをする。 ・友だちの演奏や意見を聞く態度を確認する。 ・話しやすい雰囲気をつくったり、答えやすいように指導者が発問したりする。

【ICT 活用のポイント】
タブレット端末を使って演奏を録画し、スクリーンに映して皆で鑑賞する時間を設けた。録画を見て振り返ることで、客観的に自分たちの演奏を聴き、良い部分や、改善点に気づくことができると考え

る。また、教員からの評価を受けるだけでなく、自分自身で活動を振り返り、改善しながら学習を進めていくことで、より主体的な学びに繋げていくことができると考える。

【結果】
はじめは正しい音とリズムで演奏することが難しかったが、リズムカードを使用したり、譜面を工夫することで習得することができた。周りに合わせて演奏するという意識が見られるようになった。経験が少なく自信がなかった生徒も、少しずつ積極的に取り組むことができるようになり、鑑賞の際に発言をする姿も見られた。

【考察】
同じ曲に長期的に取り組んだが、演奏動画を鑑賞し、自分たちで課題を考える活動を取り入れることで、意欲的に取り組み続ける姿が見られた。課題を見つけるだけでなく、良かったところを積極的に出し合い、達成感や次の意欲に繋げることができたと思う。生徒の実態に合わせた課題を設定し支援することで、それぞれが自信をもって続けることができた。

【まとめ】
音楽活動において、仲間と共に何かを作り上げたという経験は何よりかけがえのないものだと考えている。今回の取り組みでは、一人一人が主体的に考えながら、より良いものを共に作り上げていく意識を持って取り組むことができたと思う。今後の授業でも「力を合わせてできた」と一人ひとりが感じられるように、毎時間の振り返りや言葉かけを大切にしていきたい。そして、皆で成し遂げることの喜びや、共に奏でる楽しみを実感できるようにし、今後の学習意欲に繋げていきたい。

【R５年度　校内研修一覧】

【研究部】

時期	研修名	対象	主催
４月４日	情報研修	全教職員	情報部
４月５日	シラバス説明会	新転任者	教務部
４月６日	新転任者説明会 （学校紹介、服務規律、校務分掌、給食、保健、情報等）	新転任者	研究部
４月６日	エピペン研修	該当学年	保健室
４月７日	医ケア研修会	該当学年	保健室 医療的ケア検討委員会
４月７日	アレルギー研修会	全教職員	保健室 食物アレルギー検討委員会
４月 11 日	防犯訓練	全教職員	生活指導部
４月 19 日	喫食研修	該当者	健康教育部
５月 11 日① 小学部 ５月９日② 中学部 ６月1、８日③④ 高等部	救急蘇生法講習会	全教職員	研究部
６月 26 日① ７月 25 日② １月 10 日③	初任期研修	初任期教員	校内コーディネーター 研究部
10 月１１日 10 月 18 日	初任期研修②　上映会	初任期教員 希望者	校内コーディネーター
７月 28 日	道徳研修・人権研修（新転任研修）	新転任者	人権教育推進委員会
７月 24 日① 12 月 20 日②	腰痛予防講座	希望者	安全衛生委員会
７月 24 日、25 日	地域支援講座	地域の教職員	支援相談部
８月 28 日、29 日	夏の研修会	希望者	研究部

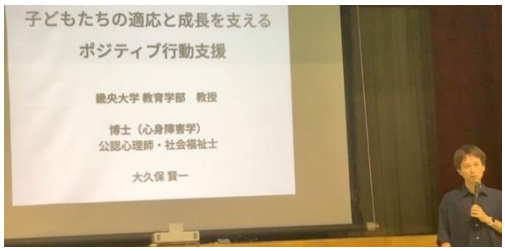
夏季休業中 ７日間	施設見学会	希望者	進路指導部
８月31 日	教育講演会	全教職員	研究部
11 月２0日	発達検査研修会	全教職員	研究部
12 月７日	人権研修	全教職員	人権教育推進委員会
12 月 26 日	大阪市南東ブロック合同 地域支援講座	地域の教職員	支援相談部
１月１６日	PT（理学療法士）研修	希望者	校内コーディネーター
１月１８日	ST（言語聴覚士）研修	希望者	校内コーディネーター
１月２６日	校内研修会	全教職員	研究部

教育講演会

「子どもたちの適応と成長を支えるポジティブ行動支援」

【研究部】

今年度の教育講演会は「子どもたちの適応と成長を支えるポジティブ行動支援」というテーマで畿央大学教授、日本ポジティブ行動支援ネットワーク会長の大久保賢一教授をお迎えした。年度当初、教職員を対象に研修に関するアンケートを行った。アンケートの回答では、児童生徒に対する日々の支援や問題行動、自傷や他傷への対応方法、アプローチについて、学部、経験や年齢を問わず、悩んでいる、具体的な解決方法がわからないという意見も多く寄せられ、今年度の教育講演会の実施を計画した。



講演では、応用行動分析学を基に子どもたちの行動の背景や原理から、問題行動に対する具体的な対応方法についての基本的な理論やアプローチについて説かれた。また、問題行動に対する対応を考える上で、多くの人々が陥りがちである「罰的な対応」の問題点や副作用が及ぼす影響、「強制」「嫌悪的」「罰的」な対応方法の問題点について、過去の研究やエビデンス、データを基に丁寧に説明された。問題行動に対する対応の基本的な介入方法について教示され、また、子どもたちの望ましい行動を支援していくために必要なこと、また、どのように目標の行動を設定し、近づけていくのかという技法について説かれた。問題行動や今を×とせずに、望ましい行動を少しずつ増やそうという発想について説明された。さらに、確かな理論を基に、これまでご自身が携わってこられたコンサルテーションなど、行動の原理を用いた実際の具体的な事例や子どもの変容を聞くことができた。

大久保教授からの最後の言葉が非常に印象に残っている。「これまで研修を行なってきた際、行動支援は「アメ」と「ムチ」なのかという質問をいただくことがあった。支援者の適切な行動に対して本人がメリットを感じられることは重要であると説いたが、「アメ」は単なるご褒美ではなく、本人の達成感、やりがいと思えるような、周りの人が喜んでくれたといったような社会的な関係性の改善も「アメ」になる。「ムチ」を使うことは明確に否定する。多くの場合は使う必要性がなく、様々な問題があり、使うべきではない。大事なのは「アメ」と「アメ」なしであり、問題行動によって「アメ」を得ている環境を見直し、適切な行動によって「アメ」がもらえるということが重要である。問題行動よりも、適切な行動に対して注目し、子どもたちの行動を良い方向に近づけていく動機づけとして考えている。日々の子どもたちの生活が、こういうことがあって嬉しい、今日学校でこんなことがあって楽しかった、先生に褒めてもらった、そういった経験がたくさん増えて欲しい。行動支援は子どもを操る手段ではなく、支援のゴールである。行動支援の結果、子どもの生活、さらには人生がたくさんの「アメ」で満たされて欲しい、ということを常に考えて行動支援をしている」。理論やエビデンスだけではなく、ポジティブ行動支援の理念、大久保教授の真摯で誠実な言葉が多くの教職員の胸に響き、心が動いたように感じた。

夏の実技研修会

【研究部】

本校教職員を対象として、教職員の資質向上、教育活動の充実、教育実践の共有を図ることを目的に夏の実技研修会を開催した。企画にあたっては、本校教職員から事前にアンケートを実施し、教職員のニーズを把握した上で、講座を企画した。集約したアンケートを基に２日間で１３講座を企画し、教職員に選択式で参加を募った。２日間で、約１５０名程度の参加があり、２学期に向けて、積極的に研鑽に励む姿が見られた。

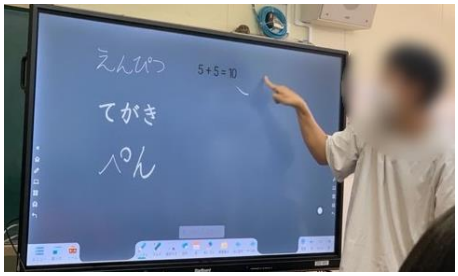
主に本校の教員が講師を務め、電子黒板の使い方やプログラミング教育などのＩＣＴ活用、授業で実施している、さをり織り体験など、明日からの授業で活用できる実践的な研修会を行った。また、進路指導部からの協力もあり、高等部卒業後の進路に関わる福祉制度の理解や相談支援事業所との学習会も行った。一部を抜粋して、報告を行う。

２日間の講座内容

【動画編集】iMovieとKeynoteを使って動画を作る方法（これから始めたい人へ）
【動画編集】iMovieとKeynoteを使って動画を作る方法（少しこだわりたい人へ）
授業で使える簡単調理実習
電子黒板の使い方と授業のアイディア
PowerPointで作るタッチ風教材
授業づくりにおける教材充実と効率化の、とある実践
Ipadを活用した授業（授業で誰でも使えるアプリと簡単なプログラミング教育）

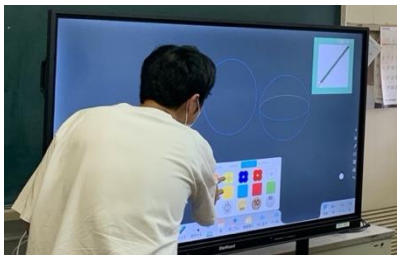
・桃鉄で社会を学ぶのねん～教育版桃鉄～ ・クイズアプリを活用した授業
相談支援事業所との学習会
スヌーズレン体験＆スヌーズレングッズを作ろう！
アイデア次第で素敵に映える✨ 生徒も喜ぶ！ おしゃれでかわいいさをり織り体験✨
進路にかかわる福祉制度について（B型アセスメント等）
きらりと光る先生方の授業紹介と お悩みを解消座談会

電子黒板の使い方と授業のアイデア💡



電子黒板の基本的な操作や実際の授業での実践や画面共有の方法などの紹介

多くの教職員の参加があり、２学期から授業に活用する教員も見られました。

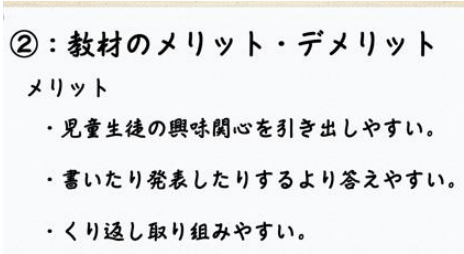


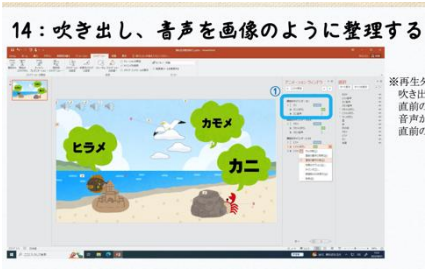
児童生徒が実際に触って学習することができる機能に参加した教員が活用に可能性を感じていました。

Power Point で作るタッチ風教材

効果音や BGM、アニメーションなどをつけ、タッチ風の Power Point 教材の作成方法について、メリット・デメリットを交えての説明。

生徒が解答をタッチすると正解、不正解の BGM が流れるように作成。





音声の挿入方法等

スヌーズレン体験

ディスコライトやミラーボール、プロジェクターなどで簡単なスヌーズレンルームを実際に体験！

スクリーンパラバルーン

桃鉄で社会を学ぶのねん～桃鉄教育版～

社会の地理等の学習として活用できるデジタルすごろく、「桃太郎電鉄教育版」の紹介を行い、実際に教員が使用し、体験してみました。地理だけではなく、漢字の学習や物件の売買で数学的な要素も含まれ、多層的な教育効果が期待できます。

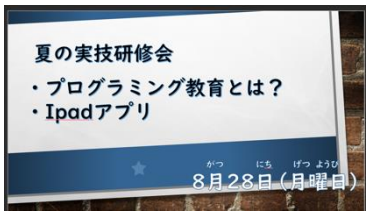
imovie, Key note を活用した動画編集

学習発表会、文化祭の「いくのシネマ」などで魅力的な映像編集を行った教員から iPad アプリの imovie, Key note を活用し、映像編集の方法について、基礎編、応用編に分かれて、実技講習会が行われました。

アイデア次第で素敵に映える✨
生徒も喜ぶ！おしゃれでかわいい さをり織り体験✨

実際に織り機を使って、さをり織りを体験！糸の色や形状などの組み合わせ方によって、作品の仕上がりがパターン化されたおしゃれな模様になったり、個性的なワンポイント模様になったりすることを実際に体験！

授業で使えるアプリとプログラミング教育



GIGA iPad を活用したプログラミング教育や授業に使えるアプリの紹介が行われ、実際に多彩なアプリを使ってみました。Scratch などのアプリを活用し、プログラミングの楽しさや興味を引き出すことや、クイズ形式によるインタラクティブな学習体験ができるアプリの紹介など、従来の学習方法に加えて、より柔軟で効果的な学びの可能性について考えることができました。

相談支援事業所との学習会

相談支援事業所の方と事例を中心にアドバイスを受けたり、今後につながる福祉サービス等について話し合うことができ、また、計画相談の流れや関連する期間も丁寧にくわしく教えて頂きました。

参加した教員の感想

“つながり”を作ること、つながるためのアンテナをはること、本人の可能性を信じること等、サポートに関する基礎や生野区の現状についてもお話を聞くことができたので良かったです。

【発達検査研修会について】

【研究部】

【はじめに】

本校では生徒の実態把握のため、入学時に保護者の協力を得て各学部で発達検査を実施している。今年度までは小学部は KIDS 乳幼児発達スケール、中学部と高等部は S-M 社会生活能力検査を実施し学部によって検査内容を変えていたが、次年度より全学部の発達検査を S-M 社会生活能力検査に統一する。これにより、子どもを同じ検査で定期的に観察して、より長期的な視点でアセスメントを行なっていくことができる。それに伴い「発達検査について」 というテーマで、大阪教育大学特任教授、早野眞美氏をお迎えし、S-M 社会能力検査について検査の概要に加え、具体的な事例も盛り込みながらお話いただいた。

【講演の内容】

講演の中では、発達検査全般の概要に続き、S-M 社会生活能力検査の概要について解説があった。その後、検査の結果からどうしても子どもの「できないこと」に目を向けてしまいがちだが、「できること」を見つけ、子どもにどのような支援をしていくか考えることが大切であること。現在の検査結果を過去の結果と比較することで生徒の実態や伸びを客観的な指標で確認することができること。会話でコミュニケーションが十分にできる生徒も、SM 検査の「移動」の領域の弱さから新規場面での対応の難しさがあるという行動観察だけでは見過ごされやすい実態が SM 検査の結果から読み取れること。S-M 検査の結果だけを重視するのではなく、他の検査と併用し日常の行動観察もふまえて総合的に子どもの実態を見ることが大切であることなど、ご自身の経験や本校生徒の事例も交えてお話しいただいた。

研修後には、参加者より「一年ごとのグラフの比較で生徒の成長がわかりやすかった」「もっとたくさん事例を聞きたかった」と感想が寄せられた。

【おわりに】

次年度はじめて S-M 検査に移行する小学部教員にとっては概要理解に繋がる機会となり、中学部や高等部教員にとっては具体的な活用の事例を知る機会となる研修会になった。

お話いただいた内容を踏まえ、次年度より更に生徒のアセスメントを充実させ、日常の指導に活かしていきたい。

【おいしい給食づくりと食育】

【給食テレビの活用】

【指導栄養教諭　寺中　純子】

【はじめに】

本校は、平成 28 年４月に大阪府に移管されたが、平成 30 年４月より大阪市の統一献立から栄養教諭が献立を作成する独自献立となった。私が赴任したのは独自献立２年目で、調理員とともに生野支援の給食をいかにおいしく作るために、どうしたらよいかを考えながら献立作成に取り組んできた。児童生徒のニーズに合わせ、年１回のリクエスト献立や月１回のセレクトデザートなど、日々おいしい給食づくりに研鑽している。また、児童生徒が食に関心を寄せるために、野菜の皮むきなど給食調理に実際に関わることで、食育への興味が高まるように取り組んだ。「煮干しの頭と腹わた取り」や「本校で育てた野菜を給食に使用する」ということを行い、家庭科の授業では、三色食品群を学んでから献立作成に挑戦し、実際に給食の献立に登場させるなどさらに発展した取り組みにつながっている。

それぞれの取組みは給食だよりや給食室前の掲示物に展示しているのみだったが、今では ICT 機器を活用することで、その日の給食のタイムリーな情報を各教室で見ることが可能になった。その取組みについて紹介する。

【ICT 機器の活用に向けて～Keynote 研修～】

令和４年夏季休業中に校内で実施した「Keynote の使い方」研修（図１）に参加したことがきっかけで、Apple 製タブレット端末を使い始めた。研修講師の教諭が作ったデータを参考に試行錯誤しながら操作しているうちに、毎日の給食で活用できないかを模索した。今までは Windows 搭載の PC で PowerPoint を使用することが多く、はじめはタブレットも使いこなせず苦労したが、Keynote だと簡単に振り仮名を打つことが可能になり、他にも視覚支援に関わる機能が充実していることで、簡単に編集や画像を貼り付けられることが分かった。

図１　「Keynote の使い方」研修資料

【ICT 活用のポイント】

1．給食テレビの完成

毎日の給食で伝えたいことは、給食室前のホワイトボードに記入していたが、Keynote 研修を受講したこともあり、二学期から Keynote で作成したスライドショーを大型テレビに放映させることを目標に取り組んでみた。はじめは不定期の予定だったが、伝えたいことがありすぎて、毎日放映することになった（図２）。

図２ 給食室前の大型テレビ

まずは Keynote で作成するためのコンセプトとして

① 伝えたいことを絞る

② スライドを 10 枚以内で収まるように作成する

③ １枚約４～５秒のスライドを１分以内で視聴できる

④ 効果音や音声を入れる

⑤ スライドショーの再生を繰り返す

の５つを設定した。伝えたいことを中心にできるだけ 10 枚以内で収まるように作成し、再生機能を使うことで、一度見逃しても、繰り返し放送しているため、何度も見ることができた（図３）。

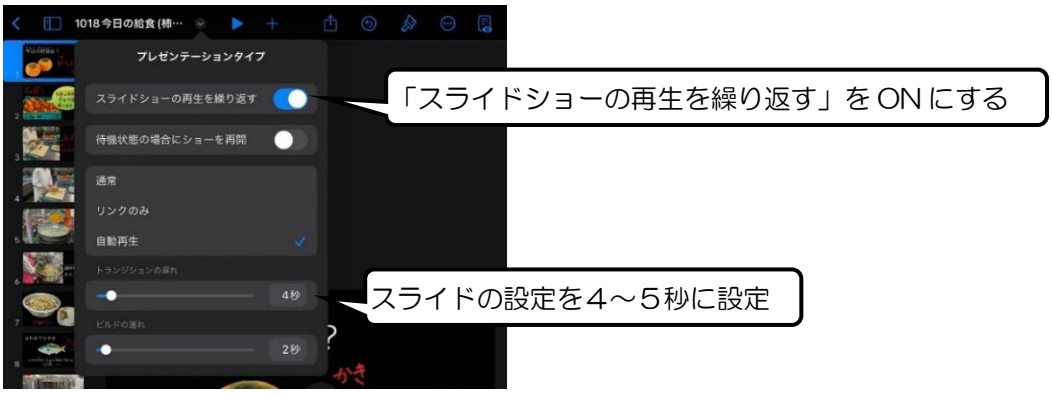


図３ 設定方法

また、効果音や音声などがあることにより、児童生徒の興味を引くことができた。さらに下地が黒で白の文字でゴシック体が障がいの特性により見えやすいということを知り、それからは黒を下地に作成した（図４）。毎日、伝えたいことを少しでも放送しようと作成していたのが始まりだったが、楽しみにしてくれる児童生徒が少しずつ増えてきた。しかし、調理作業の様子などの動画も入れ、最近では内容が盛りだくさんになっているため、１分以内に収まっていない。また、音声は自分自身の声が低いため、できるだけ高音になるように同じトーンでゆっくり話し録音するように心がけ、調理作業中の誰もいない調理員の休憩室で録音作業をしている。

図４　現在の給食テレビ

２．給食テレビの共有

毎日、タブレットで作成した Keynote は、給食室前の大型テレビに接続し、11 時 20 分頃から 13 時頃の給食返却終了後まで放映している。給食当番でなければ給食室前に来る機会がないため、給食テレビを視聴できないのが課題だった。しかし、給食テレビに興味がある生徒の担任から、教室のテレビでも視聴できるように設定方法を教えてもらうことができた。

作成した Keynote のデータをムービーに書き出し、生野支援学校の Google ドライブにアップロードする。各教室からは、先生方の個人の Google アカウントで生野支援学校の共有ドライブに入れば、給食テレビの視聴が可能になった（図５）。Keynote で作ったものよりは若干異なる部分もあるが、ほぼ給食室前の映像と同じように視聴することができる。実際に教室で毎日視聴しているクラスに確認すると、給食を食べ始めてすぐに放映したことがあったが、給食を食べるのが止まってしまうため、今は食べ始めてからしばらくしてから放映しているとのことだった。音も敏感な児童生徒もいるため、実態に合わせ視聴は各クラスにお任せしている。

図５　Google ドライブ内の給食テレビ

３．給食テレビへの出演

給食テレビはその日の給食で伝えたいことを中心に作っているが、野菜の皮むきの様子や献立作成に挑戦して選ばれた生徒のヒーローインタビュー映像なども放映している。タブレットでインタビュー映像を事前に撮影し、iMovie で編集したものを Keynote に貼り付けて作成しているが、普段より、スライドの数も多くなり全体で２分以上になってしまうこともある。児童生徒がテレビに出演する時は、校内放送でアナウンスすることで、視聴するクラスも増え、給食テレビへの興味や関心も高まっている。

給食テレビの音声はいつも同じパターンで話していることもあり、中学部の先生から希望する生徒を給食テレビに出演させてはどうかと依頼があった。早速、「今日の給食は？〇〇です」と「手を合わせていただきます」の２パターンを撮影してもらい、すぐに給食テレビで放映した（図６）。何日か続いて同学年から日替わりで生徒に出演してもらったところ、かなり反響があり、「自分も出演したい」と希望する生徒も出てきた。今は不定期だが、出演希望のある児童生徒やクラスで動画を撮影し、少しずつ「いただきます」の輪が広まっている。

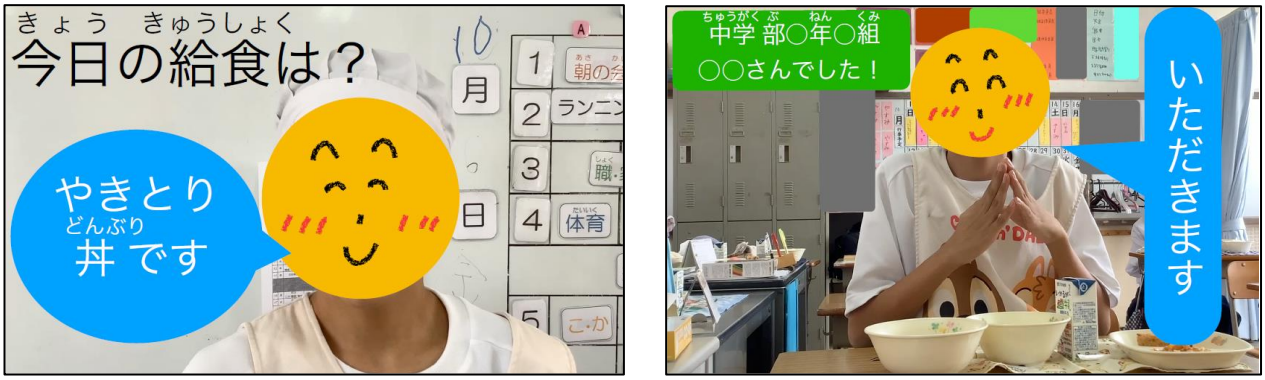


図６　給食テレビ出演時の映像

【結果】

児童生徒が主体的に給食に参加できるような取組みをすることによって、給食に興味や関心を持つ児童生徒が増えた。さらに ICT 機器を用いるようになって、テレビ出演している友だちの様子を見ることで、「自分も出演したい」と主体的に考えることができる児童生徒が増えた。人前に出るのが苦手な児童生徒も友だちと一緒ならばチャレンジすることができた。テレビ出演後に、異学年の児童生徒が声を掛け合っていることから、校内の他の児童生徒が活動を知り、興味を抱くことができた。また、皮むきのお手伝いなどの作業の様子を放映した時は、作業の振り返りをすることができた。

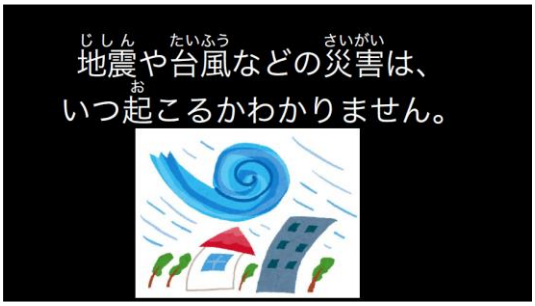
【考察】

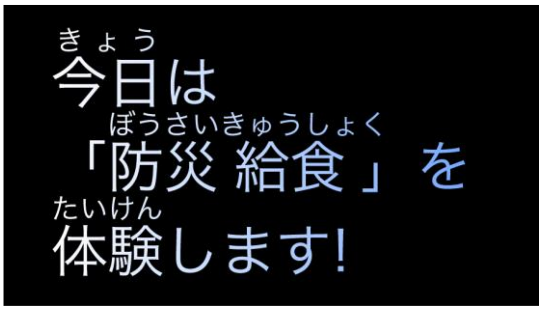
給食喫食時の話題提供にもつながるため、給食テレビの視聴へとつなげていけるようにアプローチが必要であるが、教室にタブレットなどの機器がなければテレビを視聴することができないため、教職員にも一人１台の端末が必要であると考える。さらに、給食室には無線 LAN(Wi-Fi)などの ICT 機器の環境が十分でなく、生野支援学校の Google ドライブにアップロードするのに無線 LAN(Wi-Fi)につながる場所まで移動しなければならないため、ＩＣＴ機器の環境整備を充実させることも課題である。

【まとめ】

本校の給食室は、施設が古く狭隘のため、食器も三種類しか使用できず、献立作成に限りがある。その中で、調理員と一緒においしい給食づくりを基本に献立作成をしてきたことで、児童生徒が給食に興味や関心を持つきっかけになっている。また、先生方の協力もあり、給食と児童生徒を結びつける授業も増えている。さらに給食テレビを通じて発信する（図７・図８）ことで、社会参加実現に役立つ知識をひとつでも増やしてほしいと願う。

これからも教科でない「食育」が学校全体で広まるように可能な限り発信し、給食への興味や関心につなげていきたいと考えている。





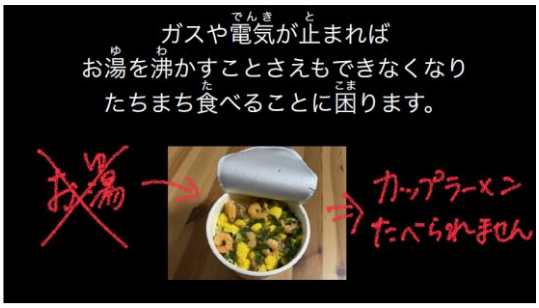


図７ 令和５年９月８日の給食テレビ

図８ 令和５年 10 月 18 日の給食テレビ

校内研修会　「地域支援のとびら」

【リーディングスタッフ　奥田　光】

はじめに

地域支援整備事業とは学校教育法第 74 条に「特別支援学校が地域における支援教育に係る中核的な役割を果たすとともに、自立活動の知見や支援教育における専門性を発揮し、小・中学校等の支援教育における取り組みを支援することである」と定義されている。本校においても小中学部の校区にある学校園に向けて、訪問相談（個別・学級全体の行動観察等）や授業改善、研修支援などを提供している。

しかし、これまで校内の教職員に向けて活動報告をする機会が少なかったため、本校の地域支援の理解を図るため現状や取組みを伝える校内研修会を行った。当日使用したスライドを用いて紹介する。

研修について

本研修の流れは図１に示している。①では地域支援整備事業や本校が提供している地域支援についての概要を説明した。また、令和４年度から大阪市ブロックは４分割され、本校と平野支援学校は「大阪市南東ブロック」として連携しながら地域の学校園に訪問相談や地域支援講座を提供している。今年度は、小学校への合同の訪問相談や 12 月に本校で合同地域支援講座、教材展示会を行った。今後もブロック内の課題や取組みを検討して、支援教育の充実を図るため、連携を強化していきたい。

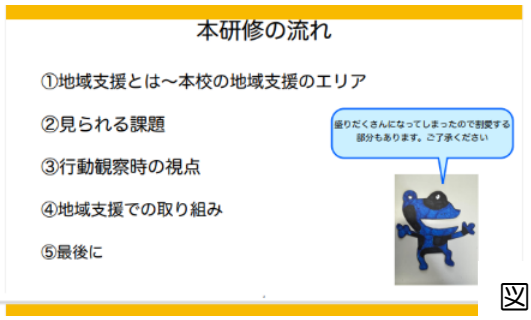
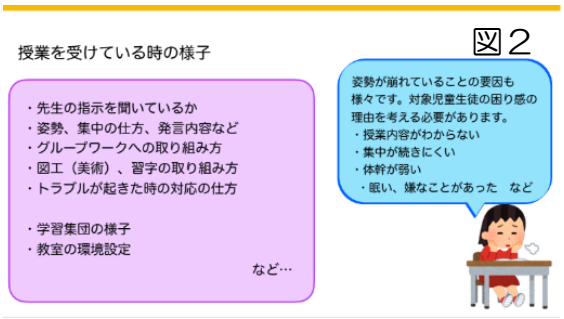


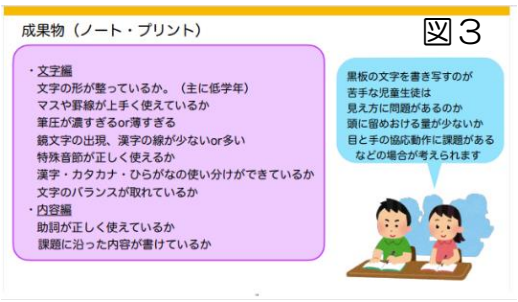
図１

②では地域支援を通して、地域の学校園が抱える課題について述べた。令和４年 12 月に文部科学省より通常の学級に在籍する小中学生の中に、学習面や行動面に著しい困難を示す子どもが８．８％いるという報告が出された。このことは平成 19 年度より支援教育が本格的に実施され、地域の学校園の先生方に支援や配慮の必要な子どもたちがいることに早期に気づくことができるようになったことが要因の一つとして考えられている。また、令和４年４月に「特別支援学級及び通級による指導の適切な運用について（通知）」が出され、これまで文部科学省が既に示してきた内容をより明確化した上で、障がいのある子どもの自立と社会参加を見据え、一人一人の教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できるよう、多様で柔軟な仕組みを整備することの重要性が改めて周知された。大阪市の学校園では令和９年度までにすべての学校園に通級指導教室を開設する予定である。通常学級、支援学級、通級指導教室など子どもたちの学びをどのように支えていくかをチームとして考えていく必要が高まっている。

③では訪問相談の際に、子どもたちの行動観察をする視点（授業での様子、成果物、コミュニケーションの方法など）について整理したものを提示した。（図２、３）子どもたちの課題だけではなく、

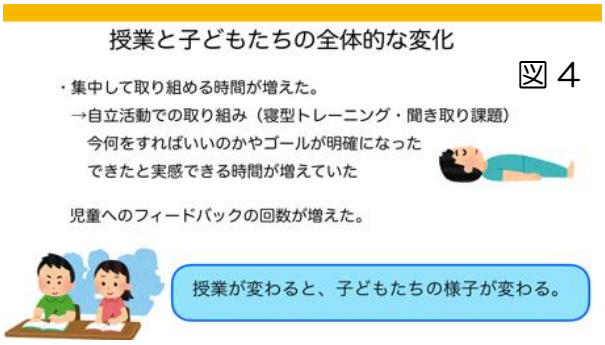
背景要因を分析することの重要性について述べた。例えば、ある授業で黒板の文字を書き写すことに苦手意識がある児童がいた場合、書き写すことの苦手さの背景要因として形を認識することのむずかしさ、黒板の文字を記憶して書き写すことのむずかしさ、手先の不器用さなどが考えられる。





また、子どもの丁寧な実態把握をするためには担任・保護者の見立てや、発達検査等で得たアセスメント情報等を多面的に捉える必要がある。支援学校のリーディングスタッフや支援学級担任、特別支援コーディネーター、担任などが校内委員会等で子どもに応じた支援、配慮について共に考え、支援を進めていくことが大切である。

④では今年度の地域支援の取組みの一部を紹介した。Ａ小学校で支援学級の研究授業（算数）の授業改善を行った。子どもたちの実態把握に基づき、教室環境の整備、自立活動の内容の精選や授業内容の検討を支援学校のＬＳと授業者、支援学級 Co.と行った。初回に授業観察したときと研究授業時とを比較すると、子どもたちの学習に向かう姿勢が変わり、主体的な動きが生まれ、達成感を感じられるような授業になるなど大きな変容が見られた。（図４）この取り組みの中で支援教育を充実させていくことは、子どもたち一人ひとりを大切にし、子どもたちの学びを支えるものであることがわかった。



さいごに

本研修を通して、校内の教職員に向けて地域支援の現状や取組みを報告することができた。今後も子どもたち一人ひとりの学びを支えるために支援学校や地域の学校園の支援教育の専門性を高めるとともに、連携しながらチームとして取り組んでいきたいと考えている。